

---

# Song Of Magic **【銀の城】**

山岡屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S o n g O f M a g i c 【銀の城】

### 【Nコード】

N 7 8 7 3 0

### 【作者名】

山岡屋

### 【あらすじ】

五十年前に他界した賢者の遺した開かずの箱が、王宮の宝物庫から盗まれた。

犯人の元から箱を取り返してくるよう命じられた光の魔法使いは、箱の中身にまつわる過去の事件の清算を強いられる事になる。軽いノリの魔法ファンタジーです。

作者本人による自サイトからの転載です。

## 1・不思議の国

汚れて傾いた「売り地」の看板がかかった空き地があった。整地された後、随分と長い間買い手がつかないまま荒れるに任せて雑草に覆われたこの空き地のジャングルの中が彼の昼寝場所になっていた。

彼は耳としっぽ、四つの足先と顔の真ん中にチョコレート色のポイントのあるシャムネコのオスだ。

人に飼われ、人に付けられた名前は「トム」という。トムはやつと大人になるうかという若いネコで、まだまだ子ネコのように頭の中は好奇心でいっぱいだった。

トムは草の上の日だまりで、お日様にお腹を向けて思い切りのびをした。その途端、トムの周りは眩しい光に包まれた。

少しして、トムが昼寝をしていた空き地の草むらにチョコレート色の髪の十歳くらいの少年が頂垂れて座り込んでいた。少年は頂垂れたまま、自分の両手を見つめてため息をついた。

「……また人間になっちゃった……」

少年は顔を上げて辺りを見回す。

「今回は時代も場所も飛んでないみたいだ」

そして、眩しそうに空を見上げた。

空を映したような青い瞳は光が差し込むと瞳孔が糸のように細くなる。そう、彼は先ほどまでここで昼寝をしていたネコのトムなのだ。

トムが何故、突然人間になってしまったのかはまた別の機会に。

トムは立ち上がってお尻をはたいた。

「もうちょっと昼寝したかったなー。ま、人間になった時裸じゃないのはありがたいけど」

人間になるのが初めてじゃないトムは人間が裸でうろつくのは変な事だとちゃんと知っていた。

何をすればいいのか見当もつかないけれど、とりあえず空き地で昼寝をしても埒があかないので外に出てみる事にした。

傾いた看板の下をくぐって空き地の外へ出るとトムは人の多く行き交う通りへ出た。

ふと、目を向けた路地の突き当たりに「不思議の国」と書かれたプレート掲げる喫茶店が目にとまった。

トムはにっこり笑うと、その店に向かって駆け出した。ネコの時、時々食べ物をもらっていた店なのだ。

勢いよく戸を開けて店に入ると、店の奥で店主の青年が振り返った。

「すみません。今日はもう閉店なんですよ。……って、あれ？」

二人は少しの間黙って互いを不思議そうに見つめ合った。

少しして青年がひざに手について腰を屈め、トムに問いかけた。

「ぼうや、一人？ 大人の人は？」

青年はトムを迷子だとも思っただけらしい。

トムは眉をひそめて青年の格好を頭のでっぺんから足の先まで舐めるように眺めた。

いつもトムが食べ物もらいに来た時の彼とは違っている上に、トムが知っている現代男性の服装とは明らかに違っているのだ。

彼は普段、トレーナー、ジーンズ、スニーカーの上にエプロンという、いたってシンプルで普通の服装をしている。

ところが今日の前にいる彼はタートルネックの長袖Tシャツの上に半袖の膝丈ワンピースを着て腰を太めの紐で縛っている。ワンピースの下はダボダボのスパッツ（ももひき？）のようなものを履いて踵のないショートブーツを履いていた。どちらかといえば女の子の服装のようである。

トムがあまりに怪訝な表情をしていたのか、青年は身体を伸ばすと腕を組んで不愉快そうにトムを見下ろした。

「何？ その異星人を見るような目は」

「だって、桜井さん変なんだもの。それ、何のコスプレ？ イベントでもあるの？」

トムの問いかけに青年は服の胸元をつまむと、

「これでもあつちじや普通のカツコなんだよ。こっちの服を着て帰ったら姫に怒られるんだ」

と意味不明な返答をする。

トムは益々怪訝な表情で引きつり笑いをしながら青年を見上げた。  
「あつちとかこつちとかって何？ ぼく、イヤな予感がするんだけど」

「こら、自分ばかり質問するなよ。おまえ、なんでぼくの名前知ってんの？」

青年が問いかけるとトムはいたずらっぽく笑って青年を見つめた。

「常連さんがそう呼んでたから」

「常連さん？ おまえ、うちに來た事あるの？ 見覚えないけどなあ」

青年は再び身を屈めてトムの顔を覗き込んだ。

トムは青年の目をまっすぐに見つめ返す。

「ぼく、時々桜井さんにごはんをもらってたんだよ」

「ごはんなんてネコにしかあげた事ないぞ？」

青年が首を傾げるとトムはにっこり笑って自分を指差した。

「それがぼく」

「はあ？！」

青年は更に顔を近づけてトムを凝視した。青年の黒い瞳がトムの青い瞳を見つめる。

薄暗い店内で瞳孔の開いたトムの瞳は光の加減で中心が赤く見えた。瞬きをするたびに文字通りネコの目のように忙しく瞳孔が収縮する。

「なるほど、ネコの目だ。おまえがあのだのシャムとはね」

青年は身体を起こすとトムの頭をクシャクシャと撫でた。

「シヤムじゃなくて、トムだよ。でも驚かないの？」

トムが意外そうに尋ねると、青年はニヤリと笑った。

「ぼくも同じくらい」ありえねーヤツ」だからね。なんで人間になつたの？」

青年の素朴な疑問はもつともだが、それについてはトムもよくわからない。

「わかんない。何か解決すればネコに戻らと思う」

「解決ねえ」

そう言いながら青年は入口に向かって歩いていった。そして、トムを店の中に入れたまま入口の「営業中」の札を裏返し、内鍵を掛けた。

そのまま黙ってトムの前を素通りすると、店の奥にある大きな鏡の前で立ち止まった。

青年は鏡の四隅に貼られたシールの上に人差し指と中指を乗せて口の中で何かをつぶやいては一つずつはがしていった。

トムはその様子を黙って不思議そうに見つめていた。

やがて青年が四つ目のシールをはがし終えると、鏡に映った彼の姿や店内の様子が消え、鏡面が水面のように波打った。

青年は振り返るとトムに問いかけた。

「あっちの国、ネコット国に解決すべき問題があるんだけど、おまえも来る？」

青年の瞳はトムが断るはずはないという確信に満ちていた。

指差した青年の手が鏡の中にめり込んで手首から先が見えなくなつた。その周りの鏡面にゆっくりと波紋が広がる。

トムは好奇心に目を輝かせて青年に駆け寄った。

「行く！ 桜井さんってその国の人なの？」

「ああ。おまえを手招いてるような名前の国だろ？」

青年はにつこり笑ってトムの手を取った。

「それと、桜井ってこっちの名前だから。あっちの名前はトゥーシヤ」

トウーシャはトムの手を引いて鏡の中へ足を踏み入れた。続いてトムが楽しそうに駆け込み二人の姿は鏡の中へ消えた。少しして波打つ鏡面が静けさを取り戻すと、鏡は元通り誰もいなくなつた店内の姿を映し出した。

## 2・盗難事件

鏡をくぐって二人が現れたのは、城の大広間だった。

トムが珍しそうに高い天井を見上げたり、あたりを見回していると、隣にいたトゥーシャが突然声を上げて前につんのめった。

二人が振り返るとそこには、お人形のようにフリルやレースのいっぱい付いたドレスを着た、見た目はトムと同じ年くらいの少女が不機嫌そうな顔をして立っていた。どうやらこの少女がトゥーシャを突き飛ばしたらしい。

少女の姿を見た途端、トゥーシャは愛想笑いをすると跪いて恭しく頭を下げた。

「これはこれはエルフィア姫。ご機嫌うるわしゅう」

トゥーシャが仰々しく挨拶をすると、姫は益々不機嫌そうにトゥーシャの頭を軽くはたいた。

「うるわしく見えるならあんたの目は節穴ね。緊急事態だって言うたでしょ？ どうしていつも余計なものを連れてくるのよ。なんなの？ この子」

姫がトムを指差すと、トゥーシャは頭をかきながら立ち上がり、笑顔で答えた。

「多分、救世主」

「ふざけないで！ 大方、帰ろうとした時、たまたまそこにいた子をうつかり連れてきただけでしょ？」

姫がそう言うのとトゥーシャは大げさにため息をついた。

「わかってるなら聞かないで下さいよ。……で？ 緊急事態ってなんですか？」

姫は真顔になると腕を組んでトゥーシャを見上げた。

「ルードの箱が盗まれたのよ」

トゥーシャは少し目を見開いたものの、さほど緊急性を感じた風



でもなく呑気に問い返した。

「なんでまた、あんなもの。何に使うんだか、何が入ってるんだかわからないのに」

ルードの箱とは五十年前に他界したネコット国の賢者ルードが遺した小さな開かずの箱である。

ルード本人の手により複雑な封印の魔法で封じられ、中に何が入っているのか、何に使うのか不明である。

あまりに嚴重に封印されているため、開けてはならない物なのだろうという事で城の地下宝物庫に入れられ、箱の周りには魔法結界を張り巡らせ、宝物庫の入口には常に警備兵が見張りに立っていた。「城の警備に問題があるんじゃないですか？」

呑気に問いかけるトゥーシャにエルフィア姫は苛々して叫ぶ。

「もーっ！　少しは緊張しなさいよ！　盗んだのは魔法使いよ！」  
しかし、トゥーシャは相変わらず平然としている。

「でしようね。魔法結界を解いて持ち去ってるんだから」  
何を言ってもものれんに腕押し状態のトゥーシャに苛ついて姫は彼に責任を押しつける事にした。

「あんたのせいよ！　なんでもっと強力でスペシャルな結界を張っておかないのよ！」

さすがにトゥーシャも面食らって反論する。

「へ？！　ぼくがやるまでもないっていうか、ぼくにやって欲しくないっておっしゃったのは姫じゃないですか！」

「だって、あんたの呪文聞きたくないんだもん」

「それは悪うございましたね」

二人がそれぞれ腕を組んでプイッと顔を背け合った時、ずっと黙って様子を見ていたトムが呆れたように声をかけた。

「……ねえ、緊急事態じゃなかったの？」

トムの声に姫は振り返ってトゥーシャを指差した。

「そうなのよ！　さっさと取り返して来なさいよ！」

「誰から？！　どこから？！」

トウーシャが問いかけると姫は後ろで手を組み胸を反らすと意地悪な笑みをたたえて、彼を横目で見上げた。

「盗んだ奴の見当はついているの。当ててごらんなさい」  
今度はトウーシャの方が苛々しながら問いかける。

「わかりませんよ。教えて下さい」

「少しは考えなさいよ。あの結界を解いて、ルードの封印を解ける自信のある魔法使いなんて限られてるでしょ？」

「ぼくじゃありませんよ。ぼくにはアリバイがあります」  
再び押し問答を始めた二人を見かねてトムが口を挟んだ。

「もしかして、エトウーリオ？」

二人は同時にトムに注目した。

「なんで、おまえが知ってるの？ 姫、本当にエトウーリオ？」

「そうよ。なんであんなわかったの？」

二人が不思議そうに尋ねると、トムは得意げな笑顔で答えた。

「ぼく、人の考えてる事わかるの。超能力ってヤツ？」

トムは人間になった時、ほんの少しだけ超能力が使える。

それは、ネコの時に持っていた能力が人間の器に入りきらなかったため、付加機能として備わったものだ。

トムの言葉にエルフィーア姫は目を輝かせた。

「トウーシャ！ 今回はほめてあげる。この子は戦力になるわ！

一緒にエトウーリオの元からルードの箱を取り返してくるのよ！」

そう言うとき姫は呆気にとられた二人に有無も言わず、衛兵を呼んで二人を城の外に放り出した。

窓から手を振るエルフィーア姫にトウーシャがわめく。

「姫！ どこへ行けばいいんですか？！」

「闇の宮殿に決まってるでしょ。さっさと行きなさい」

そう言い捨てると、姫は窓を閉めて城の奥へと姿を消した。

少しの間、閉じられた窓を眺めていたトウーシャは諦めたようにため息をつくとつぶやいた。

「……姫はいいよな。城にいて命令してりゃいいんだもの。……エ

トウーリオか……イヤな予感がするなあ」

頂垂れたまま、城に背を向けて歩き始めたトウーシャの後を追いつながらトムが尋ねた。

「ねえ、エトウーリオってどんな人？」

それを聞いてトウーシャは不思議そうにトムを振り返った。

「へ？ おまえ、エトウーリオを知ってんじゃないの？」

「別に知ってるわけじゃないよ。あのお姫様の頭の中に浮かんで見えただけだもん。そう言いたがってたの」

トムがそう言うのとトウーシャは驚いたように問いかけた。

「ええ？ 超能力ってその程度？ 他には？」

トムは腕を組んで少し空を見上げて考えた。

「んーと、箱の中身を当てたりとか、スプーンを曲げたりとか」

トウーシャは思い切り落胆して肩を落とした。

「戦力としては地味だなあ。人工衛星を地球に落とすくらいの事できるかと思っただけ」

トムは呆れたように白い目でトウーシャを見るとため息をついた。  
「やった事ないけど、多分できないよ。ってか、そんな事やる意味がわかんないし。勝手に期待して勝手に落ち込まないでよ」

「ま、いいか。元々、ぼくひとりであるはずだったんだし」

トウーシャは嘆息すると、エトウーリオについて説明した。

トウーシャとエトウーリオは元々ルーイドの弟子で、同じ光の魔法使いとして修行を行っていた。

エトウーリオは魔法に関して天才肌で瞬く間にルーイドの知識を吸収し、史上最年少で王室専属魔法使いに名を連ねる事が決まった矢先に、闇の導師の勧誘にあっさり乗って闇に転向。しばらくしてトウーシャが再会した時には闇の一族の最高位者になっていた。

闇の一族とは別に人外の者ではない。世の中や歴史の表には出ない闇の部分に関わる者たちの事だ。中には人外の者もいるらしいし、魔物を使役する者もいるとか、いないとか、詳しい事は闇に秘されていて世間には知られていない。

何がエトウーリオを闇に向かわせたのかは謎だが、トウーシヤの見解では元々自信家で自分本位なエトウーリオは王室に使役されるのがイヤだったのだらうと言う。

光の魔法の大半を習得後に闇に転向したエトウーリオは使える魔法のバリエーションでトウーシヤを遙かに上回る。魔法使いとしてはかなりな上級者だ。

ただし、彼の性格には多分に問題があった。

「ま、わかりやすく言えば、エトウーリオは悪く魔法使いなの。ちなみにぼくは、よい魔法使いのお兄さん」

そう言つてトウーシヤは自分を指差すとトムの頭をなでながら笑顔を向けた。

トムはうるさそうにトウーシヤの手をはねのけると、探るように彼の目を見つめた。

「ふーん。でも、その悪い魔法使いに苦い思い出があるみたいだね」  
トムの言葉にギクリとして、思わずうろたえたトウーシヤの脳裏をエトウーリオとの苦い思い出が走馬灯のように駆け巡った。

ヤバイと思つて意識にフタをしようとした時にはすでに遅かった。トムがトウーシヤを指差して思い切り笑い始めた。

「おまえ！　ぼくの頭の中のぞいたね？！」

トウーシヤが拳を握り、真っ赤になつて怒鳴ると、トムは笑いをこらえながら涙目で彼を見上げた。

「だって、興味あるもん、他人の過去つて。でも、あんたの傑作。ファーストキスの相手が男だなんて。しかも結構最近？　エトウーリオつてゲイなの？」

トウーシヤはひとつため息をつく。

「違うと思う。あいつは普段ものぐさなくせに、ぼくの嫌がる事をするのにはどんな労力も嫌悪感も厭わないやつなんだ。それに、どっちかっていうとロリコン。王室の大臣達の言う事は聞かないくせに、エルフィア姫の言う事は聞くし。姫に求婚した事もある。どこまで本気なのかは不明だけだね。案外、ぼくに対する嫌がらせの

「一環かもしれない」

トウーシャが不愉快そうに顔をしかめると、トムは対照的に楽しそうに目を輝かせる。

「なんか、かなり個性的な人だね。会うのが楽しみ」

「そのセリフ、あいつと会ったら後悔するぞ」

そう言いながらトウーシャがトムの顔を覗き込んで身を屈めたと同時に、今まで彼の頭があつた場所を矢が通過して横の木の幹に突き刺さった。

トムが悲鳴を上げ、トウーシャはトムが見つめる視線の先にゆっくりと頭を向けると冷や汗を流して固まった。

少しして、トムが木に刺さった矢を指差した。

「手紙がついてるよ」

トウーシャは気を取り直して矢を引き抜くと結びつけられた手紙を広げた。

それは噂のエトウーリオからのものだった。

前略。君に言っておきたい事がある。大切なのは愛だ。

そういつわけで、トウーシャ、貴様に話がある。案内をよこすのでおとなしくついて来い。

早々に闇の宮殿に来るように。 草々

手紙を読み終わるとトウーシャはガツクリ肩を落とした。

「意味がわからない……。それよりもあいつ、ぼくを殺すつもりか？」

トウーシャが大きくため息をつく、矢と手紙が黒煙を上げて消滅し、頭上三十センチくらいのところに光球が現れて、導くようにゆっくりと闇の宮殿の方角へ向かって移動し始めた。

「どうやら案内するのはこれのことらしい。ついて行ってみるか」

二人は光の球の後について闇の宮殿に向かって歩き始めた。

「案内があれば少しは楽にたどり着けるだろう」

「いつもは楽じゃないの？」

光の球にちよっかいを出しながらトムが問いかける。

トムが手を伸ばすと光球はそれをよけるように、ひょいと浮かんだり沈んだりする。それがおもしろくてトムは再び手を伸ばす。

「いつもはRPGのダンジョン並に面倒なんだよ」

「でも、魔法でパッと解決しちゃえばいいんじゃないの？」

飽きもせず光の球とじゃれ合っているトムを横目にトゥーシャは嘆息する。

「ぼくは、あそこじゃ魔法が使えないんだ」

人間の使う魔法は術者の持つ魔力を呪文によって媒体と融合させて完成する。融合させる媒体によって完成する魔法の性質は決まる。光の媒体を使えば光の魔法、闇の媒体を使えば闇の魔法といった具合である。

エトウーリオのいる闇の宮殿は深い森の中にあり、エトウーリオが支配するずっと以前から闇の力が満ちていて、日々様相を変化させていた。

おまけにエトウーリオによって至る所に罾や仕掛けが施され、無防備に入り込むとあつという間に迷子になってしまう。

光の魔法を得意とするトゥーシャは闇の力に支配された場所では、ほとんど魔法が使えないのだった。

「ふーん。魔法って案外万能でもないんだね。ところで、さっきの矢はどこから飛んできたの？」

トムは相変わらず光の球に夢中である。トゥーシャは腕を組んで苦々しげに顔をゆがめる。

「魔法で飛ばしたに決まってる。今も宮殿の大広間でふんぞり返ってぼくらの事を眺めてるんだ。そう思ったらだんだんムカついてきた。ほら、遊んでないでさっさと行くぞ」

トゥーシャがトムを急かしてピッチを上げると、それに合わせて

光の球も二人の前方へ速度を速めながら躍り出た。  
そのまま二人は光の球を追って、闇の宮殿のある森へ歩を進めた。

### 3・闇の宮殿

光の球に案内されて、トムとトゥーシャは何の妨害にも遭わず、意外なほどあっさりと闇の宮殿にたどり着いた。

光の球が通過すると自動的に門が開く。二人は門をくぐり、前庭を通り抜け、宮殿の入口に当たる大きな扉の前までやって来た。光の球は二人をそこまで案内すると、シャボン玉のようにはじけて消えた。

トゥーシャが扉に手を伸ばすと、触れる寸前に扉が軋むような音を立ててゆっくりと内側へ開いた。二人が宮殿内に入り数歩進むと、今度は扉がゆっくりと閉じられ辺りは闇に包まれた。

程なくフロアの片隅に灯りが点った。トムが楽しそうに灯りに駆け寄り、トゥーシャもその後を追う。

その場所から延びる石の階段に沿って、二人を導くように次々に灯りが点る。灯りに導かれ、長い石の階段と回廊を通り、たどり着いた大広間の扉がゆっくりと開いた。

薄暗い部屋の中央には、ぼんやりと輝く巨大な水晶玉が鎮座し、その横には金髪碧眼の美しい青年が立っていた。エトウーリオその人である。

トムとトゥーシャが部屋の中に入ると、背後でゆっくりと扉が閉じられた。

エトウーリオはトゥーシャを見つめて静かに微笑んだ。

「久しぶりだな、トゥーシャ。会いたかったぞ」

そう言うときエトウーリオはトゥーシャに向かって右手を差し出した。

トゥーシャは動かず、まっすぐに彼を睨みつける。

「何を企んでる？ おまえ今までルーイドの箱なんか見向きもしなかったじゃないか。わざわざぼくを呼び寄せて一体何の用だ」



エトウーリオは空振りに終わった右手を腰に当てると、おどけた仕草で首を傾げた。

「心外だな。旧知の友に久しぶりに会いたいと思ってはいけないのか？」

「だったら、ルードの箱は関係ないだろ！」

「貴様は普通に呼んでも来ないだろう」

「あたりまえだ！ 誰がおまえにからかわれるためにわざわざ来るか！ 箱を返せ！ 帰る！」

トウーシャが怒鳴りながら手を差し出すと、エトウーリオは薄笑いを浮かべてキツパリと言った。

「断る。何のために貴様を呼んだと思ってるんだ」

「やっぱり企んでたんじゃないか！」

トウーシャが指差すとエトウーリオは少し意外そうに目を見開いた。

「貴様、ルードの箱の噂を知らないのか？」

「知るわけないだろう」

「そういえば、辺境の地に出向してるんだったな」

エトウーリオの言う噂とは、近頃ネコット国で誰からともなく囁かれるようになったルードの箱の中身である。根拠はわからないが、中に何でも願いを叶えてくれる魔物が入っているというのだ。

エトウーリオとしては、叶えてもらいたい願いがあるわけでもなく、第一魔物が入っているという事自体信じてはいなかったが、だとするといったい何が入っているのか俄然興味が湧いてきた。

「で？ 開けたのか？」

トウーシャが尋ねると、エトウーリオは小さな箱の上蓋部分を彼に向けて突き出した。

そこに書かれている文字をトウーシャが声に出して読み上げる。

「……汝、この箱の封印を解くなかれ って、まさかそれで開けてないのか？ おまえがルード様の言う事聞くななんて薄気味悪いぞ」

トウーシャが眉をひそめると、エトウーリオは不愉快そうに言う。  
「バカか貴様は。昔から開けるなという物を開けると、ろくな事がないと相場は決まってる。もしも、開けて古代から封じ込められてた精霊でも出てきてみる」

トウーシャは額に手を当て大きくため息をつく。

「おまえこそバカだろう。この箱が封印されたのは、たかだか五十年前だぞ。どうやったら古代の精霊が入るんだよ」

「とにかく！ 私は封印を解かない。貴様が解くん」

「なんで、ぼくが？！」

「もしも、変な物が出てきて世界が混乱の渦に巻き込まれても、私は責任を逃れる事ができる」

当然だと言わんばかりにしれつと言いつつエトウーリオをトウーシャは睨みつけた。

「そんな事言われて、誰が解くもんか！」

黙って睨み合った二人に、それまで彼らのやり取りには全く興味を示さず、部屋の中を珍しそうに眺め回していたトムが突然口を挟んだ。

「ねえ、関係ない事聞いていい？ ルーイドって箱を封印した後、長く生きてたの？」

トムの素朴な疑問にトウーシャが答える。

「いや、亡くなる数ヶ月前だったはずだ。封印したのは」

それを聞いてトムは激しく驚いた。

「え　　っ？！ 封印されたのは五十年前なんだよね？！」

ルーイドの弟子だったって事は二人とも五十才以上なの？！」

トムの目には二人とも二十代前半に見える。

トムの驚きに納得してトウーシャは少し笑った。

「ああ、それが。あつちとは時間の流れが違うんだよ。エルフィーア姫は九十三才。その性悪は五百年以上生きてる」

親指を立ててトウーシャがエトウーリオを指すと彼は不愉快そうに眉を寄せ、腕を組んで言い返した。

「誰が性悪だ。貴様とて私と大差ない年だろう」

トムは目を丸くして絶句すると、しばらくの間何度も二人を交互に眺めた。少しして再びトムが尋ねた。

「もう一つ聞いてもいい？ トウーシャが光の魔法使いでエトウーリオが闇の魔法使いなんだよね？」

「そうだけど？」

トウーシャが頷くとトムはまたしても二人を交互に見つめて率直な意見を述べた。

「なんか見た目、逆な気がするんだけど」

光のトウーシャは闇を集めたような黒髪に黒い瞳で平凡な容姿。一方闇のエトウーリオは光を集めたような金の髪に碧い瞳で整った華やかな容姿をしている。見た目は確かにトムの言う通り逆である。もつとも、エトウーリオは闇の一族を統べる立場にありながら、元々光の魔法使いだったので光の魔法も操る事はできるのだが。

トムの言葉にエトウーリオは声を上げて笑い、

「なかなか正直だな、少年。ついでにいい事を教えてやろう。こつちへ来い」

と言うと手招いた。

「え？ 何？」

トムは好奇心に駆られ、エトウーリオに向かってかけだした。その姿を見つめるエトウーリオの口の端が微かに持ち上げられたのを見て、トウーシャはトムに向かって手を伸ばした。

「行くな、トム！」

「え？」

無情にもトウーシャの手をあと少しとところですり抜けたトムが、振り返りながら惰性で踏み出したその足元に魔法陣が浮かび上がった。

トムは悲鳴を上げてその場に硬直した。

「動けないだろう、少年。貴様も動くな、トウーシャ」

そう言っ、駆け寄ろうとしたトウーシャを制し、エトウーリオは

ゆつくりとトムに歩み寄り、両肩に手をかけた。

「なんなの？ これ」

トムが不安げな顔でエトウーリオを見上げて問いかけると、エトウーリオは微笑んで答えた。

「これか？ 限定一名様の動きを封じる魔法陣だ」

そして、トムの身体を反転させ、トムの目線に合わせて腰を屈めるとトウーシャを指差し、耳元で告げた。

「さあ、あいつに箱の封印を解くよう説得するんだ。でないと、おまえの命はないぞ」

反応を窺うようにエトウーリオが見つめると、トウーシャはそれを睨み返した。

「そんな脅しには乗らない！ ぼくは箱を持って帰るのが使命なんだ。封印を解く気はない！」

トウーシャが宣言すると、エトウーリオはトムの両肩を軽く叩いた。トムが驚いて小さな声を上げる。

「脅しだと思っているのか。なるほど」

トムは動きを封じられてからずっと、エトウーリオの思惑を読み取ろうと懸命になっていた。ところが、一瞬彼の意識に触れた途端、感付かれてしまったのか霞がかかったように何も見えなくなってしまったのだ。

今もエトウーリオが本気なのか脅しなのか一向にわからない。それが益々トムの恐怖心を煽っていた。

エトウーリオはトムの顔を後ろから肩越しに覗き込みながら、ゆつくりと目を細め、口元に冷たい笑みを浮かべた。そして、耳元で囁く。

「悪く思うな、少年。恨むならトウーシャを恨め」

トムの肩に添えられたエトウーリオの手が首に向かって滑っていく。彼のしなやかな指先が首筋に触れた時、そこから伝わった意識に、トムは恐怖の涙を浮かべて悲痛な叫び声を上げた。

「トウーシャ！ この人本気だよ！ お願い、助けて！」

すがるような目でトムに見つめられ、トゥーシャは苦渋の表情で歯噛みした。眉間にしわを寄せると、絞り出すように承諾の意を示す。

「……わかった。封印を解く。だから、トムは解放しろ……」

エトウーリオは一層目を細め、

「最初から素直にそう言えばいいものを」  
と言い、トムの背中を軽く叩いた。

途端に身体を自由を取り戻したトムは、急いでトゥーシャの後ろへ駆け込んだ。

背中にしがみついたトムをチラリと見て、安堵のため息を漏らすとトゥーシャはエトウーリオに問いかけた。

「封印を解くのはいいけど、ぼくはここじゃ魔法が使えない。どうするつもりだ？」

「案ずるな。貴様のために特別に用意してある」

エトウーリオが手を伸ばして指を鳴らすと、トゥーシャの右斜め前に魔法陣が現れた。

「その中では闇の因子は干渉できない。私が特別にあつらえた光の空間だ。ただし、魔法の影響力もその中だけだ」

トゥーシャはエトウーリオを横目で見ながら魔法陣に歩み寄った。  
「用意周到なことで。トムみたいに金縛りに遭ったりしないだろうな？」

トゥーシャが尋ねるとエトウーリオはイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「お望みとあらば、オプションとして追加してもいいが？」

「しなくていい」

トゥーシャはため息と共に魔法陣の中に足を踏み入れた。

トムは興味深そうに側まで駆け寄ったが、先ほどの事があるので少し離れたところから中を珍しそうにながめた。



#### 4・箱の中身

魔法陣の中に入ったトウーシャは全身で光の因子を感じ取る。

「……ホントだ。この中は光が満ちてる」

「エトウーリオが魔法陣の外からルードの箱を渡すと、トウーシャは尋ねた。

「封印の呪文は解読したんだろ？ 教えろよ」

するとエトウーリオは涼しい顔で即座に拒否した。

「横着するな。自分で解読しろ。第一、貴様と私では呪文の組成が違うだろう」

トウーシャは諦めてため息をついた。

「違うのは封印解除の呪文だろ？ …… たく、本当に自分のためにしか力使わないよな。どっちが横着なんだか」

トウーシャは床の上に箱を置くと、その前に膝をつき、両手を箱の上にかざした。

魔法の封印を解くには、まずかけられた封印の呪文を解読しなければならぬ。解読した呪文に合わせて、解除の呪文を組み立てるのだ。

術者の技量によって封印の呪文の難易度は上下する。賢者ルードの封印ともなれば、複雑さは計り知れない。それを解読し解除しようとするなら、それ相応の技量を持った魔法使いでなければ不可能なのだ。

だが、それよりも闇の領域に光の空間を作り出す事の方が、はるかに労力を要するだろうにとトウーシャは思っていた。

箱の上にかざしたトウーシャの手とルードの箱が眩しい光に包まれた。

それを見てトムが感嘆の声を上げる。

「わあ、トウーシャって本当に魔法使いだったんだ」

封印の解読に集中しているトウーシャには何も聞こえていないが、かわりに横からエトウーリオが答えた。

「あまりバカにしない方がいいぞ。彼の呪文は誰にも真似る事ができないほど凄いものなのだから」

そう言いながらエトウーリオはポケットから取り出した耳栓を耳に詰め始めた。

トムが訝しげに問いかける。

「なんで耳栓するの？」

「そりゃあ、私は闇の魔法使いだからな。光の魔法使いであるところの、彼の呪文なんか聞いたら力が抜けてしまうからな」

関係代名詞の英文和訳のようなエトウーリオの物言いにトムは益々怪訝な表情を浮かべる。無邪気に見える彼の眩しい笑顔が、かえって邪気まみれに見えて仕方がない。

それというのも、相変わらずエトウーリオの考えている事がトムにはわからなかったからだ。

エトウーリオが耳栓を詰め終わると同時に、封印の呪文を解読し終えたトウーシャが叫んだ。

「よし、わかった！ 封印を解くぞ」

何が始まるのか、興味津々のトムは固唾を飲んで見つめ、エトウーリオは耳栓をした上から更に手で耳を押さえる。

緊張した空気が張り詰めるのを物ともせず、トウーシャはそれは楽しそうになっこり笑うと、この世のものとは思えないほどのひどい音程で、呪文の歌を歌い始めた。

途端にトムが悲鳴を上げる。

「何、これ　　っ?!」

予備知識もなく、全くの無防備だったトムは思わず耳を塞いで床に座り込んだ。　　が、時すでに遅し。

トウーシャの呪文は、魔法そのものの影響を何一つ受けていないにも拘わらず、その破壊力たるや凄まじく、一度耳にすれば立ち上がれないほどの精神的ダメージを被るのだった。



やがて不協和音が止み、あたりに平和な静けさが戻ると、トムは床に手をつけて呼吸を整えた後、よろよと立ち上がり、エトウーリオを睨み上げた。

エトウーリオは耳栓を外しながらトムを見下ろして、ほくそ笑む。「どうだ。彼の魔法はすごいだろう」

「ほんつつつとにあんたって悪い魔法使いだ！　なんで教えてくれないんだよ！」

トムが憤慨するとエトウーリオは腕を組んでもしるそうに笑う。「とりあえず洗礼は受けとくべきだろう」

トムは一つため息をつくと納得して頷いた。

「でも納得したよ。確かにあれはちょっと誰にも真似できないはずだ。本当言つと不思議だったんだよね。彼が王室御用達の魔法使いだつて事が。ルーイドって、ああいうの教えたの？」

トムが眉をひそめて問いかけると、エトウーリオはクスクス笑った。

「そんな訳ないだろう。トウーシャの魔法は全部彼のオリジナルだから。おまけに”いい子にしないで”とトウーシャに歌ってもらふよ”と言つと子供が泣き止むという言い伝えもある」

「へえ、そうなの」

エトウーリオがまことしやかにホラを吹き、トムが危うく信じそうになった時、魔法陣の中から出てきたトウーシャがエトウーリオの後ろ頭を小突いた。

「そんな言い伝えはない」

エトウーリオが振り返ると、トウーシャは勝ち誇つたような笑顔で箱を差し出した。

「さあ、封印は解いたぞ。あとは自分で開ける。開けられるものならな」

トウーシャの様子に怪訝な表情を浮かべながら、エトウーリオは箱を受け取った。しばらくの間、箱をひっくり返したり振ったりしながら、手の中でクルクルと回し、散々眺め回して不思議そうにつ

ぶやいた。

「なんだ、これ？ 封印で閉じられてるのかと思ったが、どこにも開け口がないぞ？」

箱を振るとカタカタと小さな音がした。中に何か入っているのはわかるが、フタがどこだかわからない。

トウーシャは箱を指差すとおもしろそうに笑った。

「寄せ木細工のからくり箱だよ。遠目にしか見た事ないから気付かなかったけど、それ、路地裏商店組合の慰安旅行の土産でぼくが買ってきた物だ」

それを聞いてトムが驚きの声を上げる。

「えーっ?! トウーシャ五十年も前からあそこで店やってたの?!」

「だから、時間の流れが違うって言っただろう」

何か言おうと口を開きかけたエトウーリオをトウーシャが制する。「言うておくけど、開け方は知らないからな。箱の側面を決まった順番で少しずつスライドさせていけば開くらしいぞ。頑張れ」

珍しくエトウーリオをやり込める事ができたトウーシャは、エトウーリオが箱を開けるのに四苦八苦する姿を想像し、優越感に浸りながらニコニコ笑った。

ところが、エトウーリオは困った様子を微塵も見せず、ニヤリと笑う。

「そんなまどろっこしい事をせずとも、中身を取り出すのは造作もない」

エトウーリオの手を離れ、ルードの箱がフワリと宙に浮いた。

「封印が解けたからわかった。中の物からは魔力を感じない。つまり、箱を壊そうが何の支障もないはずだ」

箱の下に広げられたエトウーリオの手の平が薄紫の光に包まれる。徐々に膨らんでいく光を目にしてトウーシャは宙に浮いたルードの箱を掴むと抱きかかえた。

「やめろ！ 箱根の職人さんが丹精込めて作った伝統工芸品だぞ！」

エトウーリオは魔力を集めた手の平をトゥーシャに向けると苛ついたように叫んだ。

「そんな見ず知らずの職人さんに義理立てする謂われはない！ 箱をよこせ！ でないと、貴様ごと破壊するぞ！」

一触即発状態の二人の間に、トムが呆れたようたため息をつきながら割って入った。

「はいはい。五百年以上も生きてるいい大人が、いちいちケンカしないで。ぼくが開けてあげるから」

トゥーシャは驚いたようにトムを見つめた。

「おまえ、開け方わかるの？」

トムはにつこり笑ってトゥーシャを見上げると手を差し出した。

「ぼく、そういうの得意なの。貸して」

「おもしろい。やってみろ」

エトウーリオは魔力を引っ込めると腕を組んだ。

トムはトゥーシャから箱を受け取り、少しの間眺め回した後、クルクルと箱を回し、側面を順にスライドさせていく。最後に上ぶたを大きくスライドさせて、箱をトゥーシャに差し出した。

「はい。開いたよ」

「すごいなー。ってか、透視して開けただろ」

そう言つとトゥーシャはトムの頭をコツンと叩いた。

「えへっ。ばれてた？」

トムは頭をなでながら首をすくめた。側までやって来たエトウーリオが箱の中を覗き込む。

「なるほど、超能力か。で、何が入ってる？」

箱の中には古ぼけた銀色の鍵と折りたたまれた紙が入っている。

トゥーシャが紙を取り出して広げると、それはルードからのメッセージだった。トゥーシャがメッセージを読み上げる。

「この箱を開けし、好奇心旺盛なるバカ者よ。同封の銀の鍵を持ちて、デスバレーの銀の城なるシルタ姫を深き眠りより覚まされたし。それが汝の運命なり」

「だってさ。バカ者」

トムがエトウーリオを見てペロリと舌を出した。エトウーリオはトムを睨んで顔をしかめる。

トウーシャの読むルーイドのメッセージはまだ続いた。

「なお、バカ者はおそらくエトウーリオであるうから、姫の絵姿を同封する。　って、なんだ、これ？」

トウーシャがメッセージを読み終わり、重ねられたもう一枚の紙を広げると、そこにはエルフィーア姫と同年くらいの愛らしい少女の肖像画が描かれていた。

エトウーリオはトウーシャの手からひったくるようにして少女の肖像画を奪うと、しげしげと眺め、やがて嬉しそうに目を細めるとつぶやいた。

「かわいいじゃないか」

トウーシャは顔をしかめると後ろからエトウーリオにケリを入れた。

「この変態！」

エトウーリオは振り向くと反論する。

「何が変態だ。かわいいものをかわいいと言って何が悪い。その少年もかわいいと思うだろう？」

そう言つて肖像画をトムに突きつけると、トムはチラリと見ただけで顔を背けた。

「ぼく、人間の女の子には興味ないから」

エトウーリオは少しの間黙つてトムを見下ろした後、トウーシャに耳打ちした。

「この少年の方が、よっぽど変態じゃないか」

トウーシャは一つため息をつくとエトウーリオに説明する。

「こいつはネコだから人間に興味なくてもあたりまえなんだよ」

「どうりで。動く物に異常なほど興味を示すし、落ち着きがないと思つたら」

そう言いながら、エトウーリオは少女の肖像画のしわを伸ばし壁

に貼り付けた。少し眺めて満足したように頷くと振り返る。

「よし、早速シルタ姫を救出しに行くでしょう」

「じゃあ、はい」

トウーシャは箱の中から銀の鍵を取り出しエトウーリオに渡した。エトウーリオは鍵を受け取ると怪訝な表情でトウーシャを見つめる。トウーシャはルードの手紙を折りたたんで箱に収めると、フタをしてトムに渡した。トムは先ほどと同じようにクルクル回しながら箱を元通りに戻していく。

「ぼくは箱を持って帰るのが使命なんだ。本来なら中身も持って帰るべきなんだろうけど、中身はおまえ宛だとわかったから、百歩譲って中身はおまえにやる。おまえだって箱はいらないんだろ？ 用は済んだから帰る。行こうか、トム」

「うん」

トウーシャがエトウーリオに背を向けて促すと、トムは元通りに戻した箱をトウーシャに渡し、彼の後について出口に向かった。

## 5・城の在り処（ありか）

二、三歩歩いたところでトムは首を押さえてしゃがみ込んだ。

「いたーい！」

「どうした？」

トウーシャはあわててトムに駆け寄ると、首を押さえたトムの手を掴みではずした。

見ると、首筋に花のような赤黒いアザが浮かび上がっている。トウーシャはハッとして息を飲んだ。

「闇の刻印……！」

トウーシャが無言でエトウーリオを睨むと、彼はゆっくりと目を細めた。

「なつかしいだろう。それを刻まれた者は地の果てまで逃げようとも闇の獣から逃れる事はできない。もっとも、私のは闇の導師の物よりバージョンアップしているからな。そんな風に痛みを与える事もできるし、たとえ異世界に逃げようと逃げ切れないぞ」

「何のつもりだ」

「こんな事もあるつかと、保険をかけといた」

平然と言い放つエトウーリオにトウーシャは苛々と問い返す。

「何のために?! 箱の中身は手に入れて満足しただろう。後はおまえの好きにすればいい。ぼくらは関係ないじゃないか！」

「結末を見届けようとは思わないのか？」

意外そうに目を見張るエトウーリオに、トウーシャは腕を組んで顔を背ける。

「興味ないね。眠ってる女の子を起こしに行くだけなら、一人で行つてくりゃいいだろう」

トウーシャがそう言つと、エトウーリオは目を細くしてトウーシヤを見た。

「バカか、貴様は。シルタ姫がただ眠ってるだけだと思ってるのか？ 鍵が嚴重に封印されていたという事は、本来なら起こすべきではないはずだ。だが、鍵を手に入れたからには起こせと言っている。あのじじいは私に何か面倒な事を押しつけようとしているに違いない。そう思わないか」

トウーシャは顔を背けたまま、横目でチラリとエトウーリオを見た後、ポツリと白状した。

「思うから、行きたくないんじゃないか」

「そうと聞いたからには、是非とも一緒に来てもらおう」

エトウーリオは楽しそうに笑いながらトウーシャに手を差し出した。トウーシャはその手をはたく。

「行きたくないって言ってるだろ？！ だいたいルード様はおまを指名したんだ」

エトウーリオは腕を組んでムスツとした。

「そうだ。それが一番ひつかかる。なぜ直弟子の貴様ではなく私なんだ。あいつとは袂を分かって以来、三百年以上顔を合わせていないんだぞ。それを見極めるためにも絶対来てもらう」

「絶対、断る！」

トウーシャが間髪入れずに拒否すると、隣でトムが再び声を上げて首を押さえた。見ると、目に涙を浮かべて顔をゆがめている。本当に痛そうだ。

「卑怯だぞ、おまえ！」

トウーシャが怒鳴るとエトウーリオは意地悪な笑みを浮かべる。

「貴様が甘い事は承知している。行くと言わなければ、少年がもつと痛い目に遭うぞ」

「トムは関係ないだろう？！ ネコをいじめると、死んだ後化けて出るぞ！」

「なるほど、それは困る」

「え？」

苦し紛れに言った言葉に、エトウーリオがあっさり退いたので、

トウーシャは思わず間の抜けた表情でエトウーリオを見た。

ふとトムを見ると、痛みが退いたらしく、首をなでながらホッと息をついている。

あまりに素直なエトウーリオが薄気味悪くて、探るように見つめると、彼は再び意地悪な笑みを浮かべた。

「かわりに貴様がうんと言っまで、毎日寢所におはようとやすみのキスをしに行つてやる」

トウーシャは頭をかかえると半狂乱になって叫んだ。

「やめてくれ　　っ！！」

その様子を冷めた目で見つめながらトムが言う。

「いいんじゃないの？　そのくらい。ぼくみたいに痛いわけじゃないし」

トウーシャはすかさずトムの方を向くと、拳を握って怒鳴る。

「いいわけないだろう！　精神的に痛いじゃないか！」

「だったら、答えはひとつだな」

エトウーリオが勝利の笑みをたたえてトウーシャを見つめた。ト

ウーシャは少しの間エトウーリオを睨んだ後、吐き捨てるように言う。

「……行けばいいんだろう？　ほんつと性悪だよな」

「ねえ、そうと決まったら、この痛い取つてよ」

トムが自分の首を指差して言う、エトウーリオは、

「全部済んだらな。それまで私の機嫌を損ねないように、せいぜいトウーシャにお願いしておくことだな」

と言い、ニヤリと笑った。

「ほんつと、性悪だよな」

トムは不愉快そうに眉をひそめると、首をなでた。

「ぐずぐずしてないで、さっそと行くぞ」

そう言いながら大広間の扉を開け放つと、エトウーリオは廊下に踏み出した。

渋々その後を追いながら、トムがトウーシャに尋ねる。



「ねえ、デスバレーってどこにあるの？」

トウーシヤは首を傾げる。

「さあ？ アメリカのじゃないだろうけど、あいつが知ってんじゃないか？ 張り切ってるから」

それを聞いてエトウーリオは慌てて引き返してくると、トウーシヤに詰め寄った。

「デスバレーはどこにある？」

「ぼくが知るわけないだろう」

「あつさり言っな。少しは考えろ。その超能力少年はわからないか？」

エトウーリオに指差され、トムがキョトンとする。

「へ？ ぼくは異世界のネコだよ。この世界の事なんかわかるわけないよ」

エトウーリオは身を屈めて今度はトムに詰め寄る。

「だから、箱の匂いを嗅いでルードの残存思念を探るとかできないのか？」

トムは呆れたように目を細くしてエトウーリオを見つめる。

「犬じゃないんだから、匂いを嗅いだって何もわからないよ。第一、五十年も前の物に匂いなんて残ってないでしょ」

「使えない奴らだな」

エトウーリオは吐き捨てるように言うと、二人から顔を背けた。

その横柄な態度にムツとして、トウーシヤが後ろからケリを入れる。

「おまえこそ、少しは考えろよ！」

エトウーリオは芝居がかった仕草で両手を広げると首をすくめた。

「今、充分に考えたとも。でも、わからなかった」

「ウソつけ！」

トウーシヤが再びケリを入れると、エトウーリオは彼を睨んで指差した。

「デスバレーの場所がわからない限り、貴様らは帰さないぞ。気合を入れて考えろ」

デスバレーの場所が判明しない限り、エトウーリオは本当に帰してくれそうにないので、トウーシャは仕方なく考えてみる事にした。直訳すれば『死の谷』。そんな不吉な名前の場所には心当たりがない。だが、そんな不吉な名前が似合いそうで、もしかしたらそこにあるかもしれない場所なら、ひとつだけ心当たりがある。

「なあ、この森の中に砂漠とか塩の湖とかないか？」

「なんだ、それは」

「やっぱデスバレーっていうと、アメリカのを思い浮かべちゃって」

「そうじゃなくて、なぜこの森なんだ」

「だって、城が建ってるんだろ？ 人目につく場所なら噂になるだろうし、だったらおまえが知らないわけない。この国で人の入らない場所ってこの森だけだし、森は毎日変化してるから、おまえだって隅々まで把握してないだろう」

トウーシャに指摘されてエトウーリオは腕を組んで考え込んだ。

「そう言われれば、そうだな。塩の湖はないが、確か『銀砂の平原』があったぞ」

そうつぶやいてエトウーリオは部屋の中央の水晶玉に歩み寄った。エトウーリオが表面を手でなでると、そこに地図が浮かび上がった。トウーシャとトムも側まで来てそれを覗き込む。

エトウーリオが手を動かすと、表示された地図も移動する。

トムがおもしろそうに目を輝かせて問いかけた。

「これ、どこなの？」

「宮殿の裏手だ。裏の方は私もここ百年ばかり奥まで行った事がない」

闇の宮殿は森の中心にある。宮殿の裏手は森に沿って断崖絶壁に取り囲まれ、そこから人が侵入する事は不可能になっている。そのため、エトウーリオも罫を仕掛けたりせずに放置している。かかる人がいなければ罫を仕掛けてもおもしろくないからだ。

「あった、これだ。前見た時と比べて大分移動しているな。だが、それほど遠くはない。とりあえず行ってみよう」

エトウーリオは水晶玉に手をかざすと、短い呪文を唱えた。すると、かざした手の平に向かって、水晶玉から光の球が飛び出した。手の平の光の球に先ほどの地図の縮小版が映し出される。それを見届けてエトウーリオは水晶玉の表面をひとなでした。水晶玉から地図が消え、元通り淡い光を放った。

一連の様子を興味深そうに見つめていたトムが、早速駆け寄ってきて光の球を覗き込んだ。

「なに？ これ」

「地図球だ」

横からトウーシャも覗き込んだ。

「いいなあ、それ。ぼくにもくれよ」

「残念だな。これは闇のアイテムだから貴様には扱えない。闇の魔法を覚えたければ、いつでも教えてやるぞ」

人差し指を立てて、その上で地図球をクルクルと回しながら、からかうようにエトウーリオは言う。

トウーシャは不愉快そうに顔を背けた。

「誰がおまえに弟子入りなんかするもんか」

予想通りのトウーシャの反応にエトウーリオはクスクス笑う。

「気が変わったら、いつでも来い。さあ、行くぞ」

そう言つとエトウーリオは再び大広間の扉を開けて外へ出た。

トウーシャとトムもエトウーリオに続き、三人は闇の宮殿を出で、裏手の森へと向かった。

## 6・銀の城

地図球を持ったエトゥーリオを先頭に、トムとトゥーシャがその後について森の中を進む。

森の中は背の高い木が日の光を遮り、昼間でも薄暗い。時折、地図球を確認して立ち止まりながら、三人は着々と奥へ進んで行った。しばらくして突然トムが立ち止まり耳をすました。それに気付いてエトゥーリオが振り向き、声をかける。

「どうした、少年」

「水の音が聞こえる」

トゥーシャが少しの間、周りを見回してから尋ねた。

「どっちから？」

「あっち。たぶん川だよ」

トムは左手の奥を指差した。エトゥーリオが地図球を見ながらニヤリと笑う。

「でかした、少年。その川を遡れば目的地だ」

三人はトムの指差した方角へ少し早足で歩を進めた。やがて、進行方向の視界が突然開け、目の前の急傾斜地の下に目がくらみそうなほど眩しく輝く銀色の小川が流れていた。

「わあ、キラキラ」

トムははしゃぎながら傾斜地を駆け下りて川の側まで行くと水面を覗き込んだ。残る二人もゆっくりと傾斜を下りるとトムの側まで行った。

トゥーシャがトム同様水面を眺めてエトゥーリオに尋ねる。

「これ、なんでこんな色？ 水銀でも流れてんの？ しかも外には流れ出てないよなあ」

「微生物の色だ。銀砂の平原から湧き出した地下水が流れ出て、そ

の後地盤の亀裂から地底湖に流れ込んでから森の外には出ていない」

トムが振り返り、好奇心に満ちた目でエトウーリオを見つめる。

「この下に湖があるの？」

トウーシャはトムの両肩をつかんで川の上流を向かせると、

「はいはい、それはまた今度な」

と言い、背中を押して歩き始めた。

「えーっ？ 今度って、いつー？」

トムは名残惜しそうに振り向いたが、後ろからエトウーリオに無言で前方を指差され、仕方なく諦めて歩き始めた。

しばらくの間、銀の川を遡ると、少し開けた場所で川は銀の泉に突き当たった。覗き込むと泉の底から砂を巻き上げながら水が湧き出している。

泉の上だけ、ぽつかりと切り取られたように青空が見えていた。

そこから降り注ぐ日の光で銀の川と泉は一層キラキラと輝いていた。泉の向こうに一本、胴回りが優に三メートルはありそうな巨木が生えていた。その向こうは高さ十メートル以上の崖が左右に長く延びている。どうも行き止まりのように見えた。

「ここはどう見ても《銀砂の平原》とやらには見えないけど？」

トウーシャが尋ねるとエトウーリオは地図球を見ながら目の前の巨大な木を指差した。

「その木の裏に道があるはずだ」

トムが泉を迂回して木の裏側に駆け込み、歓声を上げた。

「わあ、トンネルだ。向こうが見える」

二人の魔法使いが木の裏側に回ると、そこには人一人がちょうど通れるぐらいの広さの亀裂が崖に穿たれていた。亀裂はまっすぐに伸びて、トムが言ったように向こう側が白く見えていた。

そんなに長いトンネルではないらしい。トムはすでに向こう側に到達して、周りをキョロキョロと見回していた。

二人の魔法使いたちもトンネルを抜けると、トム同様辺りを見回

した。

そこは、高さ五十メートルくらいの断崖に挟まれた銀色の砂漠だった。

「平原には見えないぞ。どう見ても谷だ」

トウーシャがそう言うのとトムも同調する。

「ここがデスバレーじゃないの？ お城もあるし」

トムが指差す崖の中腹には古ぼけた城が建っていた。

「妙だな。地図上は平原になっている」

エトウーリオは地図球を見つめて首をひねった。

「でも、ここがデスバレーに間違いなさそうだぞ。立て札立ってるし」

トウーシャの指摘でトムとエトウーリオが振り向くと、先ほど出てきたトンネルの横に『ようこそデスバレーへ』と書かれた立て札が立っていた。

エトウーリオは立て札を睨んで拳を握った。

「あのじじい、人の領地に勝手に手を加えやがって！ ここを谷間にしたのもあいつに違いない！」

「じゃ、あれが《銀の城》らしいから、行くのでしょうか」

トウーシャはエトウーリオの肩を叩いて促すとトムと共に三人で右手の崖の中腹にある銀の城へ向かい歩き始めた。

楽しそうに崖を駆け上がるトムと、不服そうにしかめっ面で崖に登るエトウーリオに続いて歩きながら、トウーシャは色々と考えていた。

シルタ姫とは何者なのか。ルードはなぜ、自分ではなくエトウーリオを指名したのか。

そもそも、ここを《デスバレー》と命名したルードの真意がわからない。銀の城には死に直面するような危険が待ち構えているのだろうか。

少しして三人は崖の中腹にある城の前にたどり着いた。古ぼけた城は《銀の城》というよりは、《いぶし銀の城》という感じである。エトウーリオはルードの箱の中に入っていた銀の鍵を取り出すと、入口の扉に差し込み開錠した。錆び付いた扉を軽く蹴ると、扉は錆の粉や埃を振りまきながら、鈍い音と共に内側に開いた。

城の表から見る限り窓は見あたらなかった。石造りの城の中は当然ながら闇に閉ざされている。エトウーリオが持つ地図球の淡い光を頼りに三人は暗闇の城内に足を踏み入れた。

エトウーリオが地図球を掲げて辺りを見回しながら歩を進める。入口から十メートルばかりは天井の低いレンガ造りのトンネルになっていた。そこを抜けると五十メートル四方の巨大な空間に出た。城の裏手側の天井付近に小さな窓がひとつある。そこから微かに入り込む光で、うすぼんやりと城内が見て取れた。

巨大な空間は天辺までまっすぐに吹き抜け、幅一メートルくらいの手すりのない石の階段が壁に沿って、天井から五メートル下の扉の前で止まっている。

三人は各々、その空間を眺め回した後、階段の終わりにある扉に目をとめた。

「どうやら、あそこしか入口はないようだな」

エトウーリオが扉を見つめてそう言うと、他の二人も頷いた。

階段に向かって駆け出そうとしたトムの肩をエトウーリオが掴んだ。

「待て、少年。おまえは後だ」

「えーっ？　なんでー？」

トムが不服そうにエトウーリオを振り返る。

「不用意にあちこち触ったり、踏まれたりされては困る。見た目や造りからして怪しいじゃないか、この城は。トウーシャ、貴様が先だ」

「なんで、ぼくが？」

エトウーリオの命令にトウーシャが思わず反論すると、彼はニヤリと笑った。

「突き落とされては困る。貴様には色々と恨みを買っているからな」  
「わかってるんなら、恨みを買うような事しなけりゃいいんだ。おまえこそ、突き落とすなよ」

そう言つてエトウーリオに背を向けると、トウーシャは短い呪文を唱え、頭上に光の球を掲げながら階段に向かって歩き始めた。それを見てトムが驚いたように問いかけた。

「あれ？ 魔法使えるの？」

「ふーん。気付いてたのか」

エトウーリオも感心したように言う。

トウーシャは少し振り返つて二人を見た後、再び歩きながら答えた。

「そのくらいわかるさ。この中は外とは全然空気が違う。こんなに薄暗いのに強い光を感じる。でも、同時に強い闇も。だからおまえも怪しんだんだろう？」

「その通りだ。トラップがないか、しっかり確認しながら慎重に進め」

「つたく、結局面倒な事は全部ぼくにさせるんじゃないか」

ブツブツ言いながらもトウーシャは先頭に立って石の階段を上り始めた。その後にはトム、最後にエトウーリオが続き、ゆっくりと慎重に階段を上る。

カメのような遅い歩みにたいくつして、トムがあちこちに手を伸ばそうとするたびに、後ろからエトウーリオがその手をはたいた。やがて、通常の五倍の時間をかけて、ようやく階段の終わり、扉の前に到達した。

トウーシャは扉を調べ取っ手に手をかけた。が、押しても引いてもビクともしない。もう一度取っ手を調べようと光の球を近づけ、よく見ると扉の取っ手の上に文字が刻まれていた。

「Key word please    つて、なんで英語？」



トウーシャが困惑した表情で取っ手を眺めていると、エトウーリ才が不思議そうに尋ねた。

「貴様の出向先の言葉か？」

「そうだけど、なんだろう。マジックロックされてるわけじゃないから呪文じゃないと思うけど……おまえ、キーワードに心当たりある？」

「あるわけないだろう。異世界の言葉など」

「やっぱ、英語かな？ Open Sesame!」（訳：開け、ゴマ！）

そう言った後、期待はしていないもののトウーシャは少しの間取っ手を見つめた。しかし、当然のごとく扉はうんともすんとも言わない。

「ダメか……。何なんだろう……」

トウーシャが首をひねっていると、ひとりだけ意味のわからないトムが苛々したように尋ねた。

「ねえ、どういう意味？」

「キーワードをどうぞって英語で書いてあるんだよ」

トウーシャが説明すると、トムがおもしろそうに笑った。

「英語なの？ ぼく、ひとつだけ知ってるよ。意味は知らないけど」

トウーシャは目を見張ると、

「へえ、賢いネコだな。試しに言ってみて」

と、扉を指差した。

トウーシャに促されてトムはにっこり笑うと扉に向かい、大きな声でキーワードを唱えた。

「This is a pen!」

トムの言葉に思わず笑おうとしたトウーシャの横で、扉からカタリと鍵のはずれるような音がした。

「へ？」

トウーシャは目を見開くと、笑いかけた顔を引きつらせ扉に目を向ける。そして、恐る恐る取っ手をひねった。キィと軽い音を立て

て扉は内側に開いた。

「なんで?!」これはペンです”って、何がペン?!」

トゥーシャが混乱して頭をかきむしると、トムが平然と扉の取っ手の下を指差した。

「これじゃないの? これはペンだよね」

トムの指差す場所に顔を近づけて見ると、そこにはデフォルメされたペン先の絵が描かれていた。

「……そうだけど、やっぱり意味がわからない!」

トゥーシャが再び頭をかかえると、エトゥーリオが後ろから背中を押した。

「そんな事はどうでもいいから、先に進め。この先どれだけ関門があるかわからないんだぞ。いちいち理由なんか考えているヒマはない。それに、これに関しては貴様の調査不足だろう」

「……自分は何ひとつ考えてないくせに……」

エトゥーリオを睨んでポツリとそう言うと、トゥーシャは扉の内側に続く狭くて真っ暗な廊下を光の球を掲げてゆっくりと進み始めた。

## 7・眠れる姫君

しばらくの間、例のごとくトゥーシャを先頭に三人は暗闇の中をゆつくりと進んだ。入口の扉が見えなくなるほど進んだところで、狭い廊下は再び扉に突き当たった。トゥーシャが振り返ってエトウーリオに問う。

「どっちに行く？」

「前に行くしかないだろう」

エトウーリオが当然の事を聞くなと言わんばかりに無然として答えると、トゥーシャは光の球を移動させながら左手を指差した。

「この下に階段があるんだ」

トムとエトウーリオが覗き込むと、左手に狭い階段が地下の暗闇に向かって消えていた。

「ぼくとしては、地下の方がお勧めなんだけど」

トゥーシャが笑顔で提案すると、エトウーリオは不敵に笑う。

「バカを言うな。正面の扉に決まってるだろう」

トゥーシャは笑顔のまままで軽く両手を広げながら、ゆつくりと扉の前に移動して立ち塞がる。

「いやあ、ここラスボスの部屋だし。こういう時は、周りを全部調べて最強の武器とか手に入れた後で挑むのが筋だから」

「何をゴチャゴチャと訳のわからない事を言っている！そこをどけ！」

苛々したようにそう言うと、エトウーリオは扉の前からトゥーシヤを押し退けた。そして、振り向いてトムを手招く。

「少年、おまえの出番だ」

「え？ぼく？」

呼ばれてトムは、訳もわからないままエトウーリオの側へ行く。

エトウーリオはトムの肩に手をかけ、目の前の扉を指差した。

「中を透視しろ。何が見える？」

トムは言われた通りに、部屋の内側に意識を集中した。

「……ベッドがある。……部屋の真ん中……。あ！見て！女の子が寝てる！あれがシルタ姫じゃないの？！」

トムがエトウーリオの腕を激しく叩きながら興奮したように言う  
と、エトウーリオは冷めた目でトムを見下ろした。

「無茶を言っな。見えるわけがないだろう。だが、この部屋で間違  
いなさそうだな」

エトウーリオは意味ありげな笑みをたたえてトウーシヤを見つめ  
た。トウーシヤは無言でその目を見つめ返し、ひとつ嘆息する。

トウーシヤが目の前の扉よりも地下を推したのには理由がある。

エトウーリオもそれに気付いていたのだろう。

城の中に入った時に感じた相反する力。目の前の扉からは強い闇、  
そして、地下の暗闇からは強い光を感じたのだ。強い闇の力に支配  
された部屋の中で眠っているシルタ姫は、やはりただ者ではないの  
だろう。

扉には何の仕掛けも施されていないようだ。エトウーリオは扉を  
開けて部屋の中へ入った。

窓にカーテンが引かれた薄暗い部屋の中央には、トムが言ったよ  
うに天蓋付きのベッドがひとつあった。その上には少女が一人眠っ  
ている。

トムがエトウーリオの後ろから部屋に駆け込み、ベッドの側まで  
行くと、眠っている少女の顔を覗き込んだ。その後が続いてトウー  
シヤも渋々、部屋に入った。

二人の魔法使いたちもゆっくりとベッドに歩み寄ると、トムの後  
ろから眠っている少女を見つめた。

トムと同じチョコレート色の髪に透けるような白い肌、バラ色の  
唇。まつげの長い瞳は閉じられているものの、目の前で静かに眠る  
少女は紛れもなく肖像画のシルタ姫である。

エトウーリオはシルタ姫を見つめて嬉しそうに目を細めた。

「本物の方がかわいいじゃないか。寝顔もいいが、目を開けたらもつとかわいいだろうな」

横からトウーシャがエトウーリオの後頭部を軽くはたく。

「このロリコン！ どうやって姫を起こすつもりだよ」

「そりゃあ、もちろん王子様のキスだろう」

エトウーリオが笑顔で答えた時、トムがベッドの上に這い上がり四つん這いになって姫の側まで近付いた。

「本当に眠ってるだけ？ 生きてるの？」

そう言いながらトムは、無遠慮に至近距離でシルタ姫の顔をしげしげと眺める。

「こら！ 何をしている」

エトウーリオがトムの足を引っ張った。体勢を崩したトムがシルタ姫の上に倒れ込む。その時、トムの唇がシルタ姫の唇に重なった。それを見てエトウーリオは慌てて手を離れた。

トムはベッドの上に座り込むと、振り返ってエトウーリオを睨んだ。

「何すんだよ！」

「だまれ、小僧！ 姫の可憐な唇を汚しやがって！」

エトウーリオが叫んだと同時に、トムは首を押さえてわめいた。

「いたーい！ エトウーリオが引っ張るからじゃないかあ！」

「うるさい！」

怒鳴るエトウーリオの肩をトウーシャが叩いた。

「おい……」

エトウーリオはトウーシャを見た後、彼の視線の先に目を移した。見ると、首を押さえてうずくまるトムの横で、シルタ姫が目を開いてぼんやりと天井を見つめていた。

驚いたエトウーリオがトムを痛めつける力を消したため、トムは身体を起こし、ホッと息をついて首をなでた。

シルタ姫はゆっくりと首を巡らせ、肖像画と同じ緑がかった琥珀

色の瞳で横にいるトムに目を止めると身体を起こした。それに気がついたトムがシルタ姫の方を向く。

「あ、起きた」

シルタ姫はにつこり笑うと、トムに抱きついた。

「セルダ、戻ってきてくれたのね」

「え？ セルダって何？ ぼくトムだよ」

「ずっと、会いたかったの」

「だから、何の事？」

トムはシルタ姫から逃れようとものがくが、姫がきつく抱きしめていて逃れられない。

困ったトムは二人の魔法使いの方を向いて助けを求めた。

「ねえ、この子変だよ。なんとかしてよ」

「何を言うか、無礼な！ さっさと姫から離れろ！」

エトウーリオが怒鳴ると、トムは身体に巻き付いた姫の手を押さえながら困ったように訴える。

「そんなの姫に言つてよ」

エトウーリオがベッドにひざを乗せてトムに手を伸ばすと、それまで全くこちらを見向きもしなかったシルタ姫がエトウーリオを睨んで声を上げた。

「触らないで！ セルダは私のものよ！ 誰にも渡さない！」

シルタ姫の周りで闇の気配が色濃くなった。それまで混乱して姫の心を読めずにいたトムは、その時初めて闇に閉ざされた彼女の心に触れ、恐怖に身をすくませた。

「……やだ……怖い……！」

泣きそうな顔のトムをチラリと見た後、エトウーリオはシルタ姫をまっすぐ見つめて静かに言った。

「そいつは君の言うセルダじゃない。ただのネコだ。そいつも嫌がつてるだろう。だから、手を離せ」

エトウーリオにしては考えられないくらい下手に出ているのを見て、トウーシャは少し驚いた。だが、そんな事情を知らないシルタ

姫は、益々トムをきつく抱きしめるとエトウーリオに対して敵意を露わにする。

「近寄らないで！ 出てって！」

エトウーリオは黙ってベッドから下りると、少し眉を寄せてシルタ姫を見つめた。

シルタ姫の周りで一層闇が濃くなった。その気配を感じたのかトムが怯えたように小さな声を上げると、すぎるような目でトウーシヤとエトウーリオを交互に見つめる。

トウーシヤがエトウーリオの肩を叩くと、あごをしゃくって外へと促した。エトウーリオは珍しく黙ってトウーシヤに従った。

そろって部屋を出ようとする二人にトムが泣きそうな声を上げる。  
「どこに行くの?! 置いてかないで！」

トウーシヤは笑顔でトムを振り返り、エトウーリオを指差した。

「こいつが嫌われてるみたいだから追い出してくる。すぐ戻るから、それまで姫の相手をしててくれよ」

「やだ！ ぼくも行く！」

トムは焦ってシルタ姫を振りほどこうとしたが、身体に力が入らない。

「すぐ戻るから」

トウーシヤは笑顔でもう一度言つと、エトウーリオの背中を押して部屋の外へ出た。

後ろ手に扉を閉めると、トウーシヤはエトウーリオを睨んだ。

「だから、ラスボスの部屋は最後だって言っただろう」

「貴様の言う事は意味がわからない。だが、あの尋常ではない闇の正体はわかる」

エトウーリオが無然としてそう言つと、トウーシヤは感心したように少し目を見開いた。

「へえ、さすが闇の最高位。で、何？」

「呪いだ。しかもかなり古い。シルタ姫の言動がおかしいのは呪いに操られているからかもしれない。まあ、単に正気を失っているだ

けかもしれないがな」

それを聞いてトウーシャは難しい顔をしてうなった。

「やっぱ、面倒な事になったなあ。とりあえずルード様が何か対策になるものを遺してるかもしれないから、この下に行ってみよう」

トウーシャが頭上に光の球を掲げながら、地下へと延びる細い階段を下り始めると、その後について進みながらエトウーリオが他人事のように呑気に告げた。

「少年を助きたいなら、少し急いだ方がいいぞ。そんなに長くはもたない」

「げっ！ 先に言えよ！」

トウーシャは少しエトウーリオを振り返った後、トラップの確認もそっちのけで慌てて階段を駆け下りた。



## 8・地下の光

駆け下りた階段の終わりにはトウーシャの背丈の半分くらいしかない小さな扉があった。

扉を見てエトウーリオが言う。

「ルードサイズだな」

エトウーリオが言うようにルードは小さな老人だった。トウーシャもニコニコしながら扉を調べる。

「なんかキーアイテムが手に入りそうな予感。よし、何も仕掛けはないし入るぞ」

扉を開けると二人は身を屈めながら部屋の中に入った。部屋の中は窓も灯りもなく真っ暗である。

トウーシャが光の球を前方へ向けた時、少し先の闇の中に人影が見えた。

驚いたトウーシャは二、三步後ずさりした後、そちらへ光の球を向けながら身構えた。

「だ、誰だ！」

後ろからエトウーリオがトウーシャの視線の先を少し注視した後、彼の肩をポンと叩いてニヤリと笑った。

「貴様だ。よく見る」

「へ？」

トウーシャは呆けたようにエトウーリオを見た後、再び前方に目を向けた。光の球を近づけて二、三步前に出ると、そこには緊張した表情で見つめる自分の姿があった。

トウーシャはホッとしたように息をついた。

「なんだ、鏡か。なんで部屋の真ん中に……」

「さあな。貴様の言うキーアイテムじゃないのか？」

エトウーリオはそう言いながら、鏡に歩み寄った。鏡面を覗き込み、手を触れようとした瞬間、鏡が眩しい光を放った。

エトウーリオは慌てて手を引っ込めると一歩退いた。鏡の放つ光で部屋の中がぼんやりと明るくなった。思ってた以上に天井が低く狭い部屋には、鏡の他に何も無い。

やがて鏡の発する光は徐々に輝きを弱め、鏡面に小さな老人の姿を映し出した。その姿に驚いて言葉を失ったエトウーリオに、鏡の中の老人は微笑みかけた。

「やはり来おったか、バカ者め」

あまりの驚きに、エトウーリオは少しの間硬直した後、やっと思いで言葉を絞り出した。

「……ルード……？ 死んだんじゃないかったのか……？」  
「ルード様？」

トウーシヤも驚いて鏡に歩み寄る。

二人を見つめる鏡の中のルードは更に目を細めた。

「確かに身体の方は死んだがな。シルタが気がかりじゃったし、おまえが来る事はわかっておったでな。魂だけここで眠っておったのじゃ。おまえの魔力の波動を感知して、目覚める仕掛けにしておいた」

エトウーリオは腕を組んで不愉快そうに横を向いた。

「勝手に人を目覚まし時計がわりにするな。早い話が地縛霊か。迷ってないでさっさと成仏しろ」

ルードはエトウーリオの言葉は無視して、懐かしそうに笑顔を向ける。

「それにしても、大きくなったなあ、エト」

「気安く呼ぶな！ あれから三百年以上経ってるんだぞ。大人になつて当然じゃないか！」

すっかりルードのペースに巻き込まれて調子を狂わせているエトウーリオが珍しく、そしておもしろかったのでトウーシヤは思わずクスリと笑った。

しかし、エトウーリオの言葉によれば、トムは一刻を争うという。二人の漫才をいつまでも見ているわけにはいけないので、ルードに問いかけた。

「ルード様、シルタ姫は何者なんですか？ エトウーリオが言うには古い呪いをかけられているらしいです。ぼくらは何をすればいいんですか？」

ルードは穏やかに微笑むとトウーシャに言う。

「トシ、おまえは何もせんでよい。ただ、シルタのために祈ってやっておくれ」

「へ？」

トウーシャは意味がわからず眉をひそめる。

ルードはトウーシャとエトウーリオを見つめた後、ゆっくりと話し始めた。

「あの子は、かわいそうな子なんじゃ。あの子自身には何の罪もない。少し長くなるがいいかの？」

断りを入れるルードにトウーシャは申し訳なさそうに注文をつける。

「できるだけ手短にお願いします。仲間が姫に拘束されてるんです」「おや、おまえたちだけではなかったのか。じゃあ、かいつまんで話すかの」

ルードは驚いたようにトウーシャを見つめた後、先ほどよりは幾分早い口調でシルタ姫の生い立ちを語り始めた。

## 9・Once Upon a Time

今より五百年以上も前の事、ネコット国の東隣に小さな国があった。今はもう無くなってしまったその国は、若い国王が治めていた。国王には相愛の美しい王妃がいた。仲睦まじい二人だったが、結婚して数年が過ぎても子宝に恵まれなかった。

大臣達は側室を取るように何度も王に勧めたが、王はこれを頑なに拒否した。

その頃、困り果てた大臣の一人が城下で妙な噂を聞きつけてきた。愛し合う二人が決められた手順に従って同時に飲めば、数ヶ月以内に必ず子宝に恵まれる魔法の薬があるという。その薬を作れる魔女の居場所も調べてきたと大臣は王に告げた。

王は世継ぎの事をとやかく言われるのに、いいかげんうんざりしていたが、側室を取らされるよりはマシだと思い、とりあえず魔女に会うだけ会ってみる事にした。

数日後、大臣の連れてきた魔女は、まだ年端もいかぬ少女のような幼い容姿をしていた。だが、王を見つめる艶っぽい瞳やしたたかな物言いから、彼女が見た目通りの年齢ではない事が容易に見て取れた。

魔法の薬は男女別々のものを調合するのだという。魔女は王の許しを得て、別室で王妃と二人で話をし、次に王と二人で話をした。

二人きりになると魔女は王に、魔法の薬など使わずとも子宝を欲するなら自分を側室に迎えてはどうかと申し出た。

王はこの申し出を丁重に断った。自分は王妃以外の女性を王宮に迎えるつもりはないと。

それを聞いて魔女は妖艶に微笑んだ。

魔女は王の王妃に対する気持ちを確かめたかったのだと言う。二

人の愛が本物でなければ薬の効き目はないからと。

その数日後、魔女は魔法の薬を携えて再び王宮を訪れた。

王と王妃にそれぞれ薬を渡し、王妃の月のものが始まった日から数えて十四日後の夜に、二人同時に薬を飲むように告げて帰って行った。

それからしばらく経って、魔女に言われた通りに薬を飲み、その数ヶ月後、王妃の懐妊が確認された。更に数ヶ月後、王妃は元気な女の子を出産した。

王妃によく似た愛らしい女の子は『シルタ』と名付けられ、国中の祝福を受けた。

だが、シルタ姫の無事な誕生を心底驚き、快く思っていない者がひとりだけいた。王妃の懐妊を助ける薬を調合した張本人の魔女である。

彼女は王に一目惚れし、我が物とするため後宮に入ろうとした。ところがこれを王に拒まれ、王の寵愛を一身に受ける王妃に憎しみを抱き、魔法の薬ではなく呪いの薬を調合したのだ。

薬を飲んだ王妃が薬を飲んだ王の精を受ける事で呪いは完成する。呪いの薬で育まれた子供は、王妃の体内で魔女の呪いを濃縮させながら成長し、やがて王妃を死へと誘い、母親の死により外界へ生まれ出ることなく共に命がつきるはずだった。

二人が同時に薬を飲まなければ呪いは完成しない。ここに魔女の誤算が生じた。

実は王妃しか薬を飲んでいなかったのだ。魔女の微笑に背筋が凍るような感覚を覚えた王は、彼女の薬が薄気味悪くてどうしても飲めなかったらしい。

結果、呪いは未完成となり、王妃は命を落とすことなく、姫も元気に生まれてきた。

だが、未完成とはいえ魔女の呪いを体内にかかえて生まれてきたシルタ姫は普通の子供ではなかった。

姫に長く接していた者が次々と体調を崩していく。彼女が好意を

抱いた者ほど、その影響が顕著に現れた。

最初は乳母、そして王妃に王、教育係に世話役の女官等、次々に体調を崩しては亡くなっていった。

姫の誕生から二百年が経過した頃、王の亡き後宰相として国を切り盛りしていた彼女の叔父が、身の回りに不審な死が後を絶たず、いつまで経っても少女の姿のまま年を取らないシルタ姫を気味悪がって、城の奥に閉じ込めた。

そして、シルタ姫の誕生に魔女が関わっていた事を知ると、隣国ネコット国の大賢者ルードに助言を求めた。

程なくルードは、宰相がシルタ姫を幽閉するために造らせた銀の城に招かれた。

初めて会った時、シルタ姫はルードを見つめて微かに寂しそうな笑顔を見せた。話しかけても無表情のまま淡々と受け答えをする。感情を押し殺しているようだった。

呪いを受けて生まれたとはいえ、シルタ姫の本質は普通の女の子だ。

自分に関わる人間が次々に亡くなっていくのを見送り続け、おまけに身内である宰相に閉じ込められ、彼女の心の中には徐々に深い闇が蓄積されていたのだらう。暗い目をした少女の心は砕け散る寸前だった。

一連の事情を宰相と王の側近だった者から聞いたルードは姫の事を自分に一任してもらい、銀の城から王宮関係者を遠ざけた。

魔女の呪いを解くには、張本人の魔女に解いてもらうのが手っ取り早い。魔女は行方知れずだという。

ルードはまず、宰相がシルタ姫を閉じ込めるためにかけた鍵を銀の城から全て取り除いた。シルタ姫の部屋の鍵も、扉の鍵も、城そのものの鍵も。

万が一に備えて城の周りと国を取り囲むように魔法障壁のための仕掛けを施した。

成すべき事はわかっている。魔女に呪いを解いてもらえない以上、

呪いそのものを消さなければならない。

全身に呪いを帯びて生まれてきたシルタ姫。その姫から呪いを消すという事は。

ルードはシルタ姫の部屋の中に目に見えない魔法陣をひとつ描いた。準備は全て整っている。あとは魔法陣の中でシルタ姫に呪文を唱えればよい。だが、ルードはそれをためらっていた。

その時が来るのを先延ばしにするように、ルードは毎日シルタ姫に話しかけた。シルタ姫が嫌がるので一定の距離以上は近づけないが、その内シルタ姫もルードに心を開いていった。ルードの勧めで時々城を出て前庭を散歩するようにもなった。

人に関わる事はできないが、できればこのまま静かに余生を送ってもらいたいとルードは思った。

ある日、前庭を散歩するシルタ姫の前に近所の少年が迷い込んできた。森の奥に新しく建てられた城が珍しくて覗きに來たのだ。

シルタ姫の外見より少し年下に見える少年は、『セルダ』と名乗り、人なつこく笑いながらシルタ姫に話しかけた。

セルダはその後も度々訪れては、シルタ姫が拒むのもお構いなしに彼女にまわりついた。

ルードもシルタ姫に触らないように注意したが、意味のわからないセルダには効果がなかった。

シルタ姫は、いくら拒んでもためらいもなくまわりつくセルダをかわいく思い始めていた。

少しして、足繁く通っていたセルダがパツタリと姿を見せなくなった。シルタ姫の表情が曇る。自分に接していたため、体調を崩した事は明白だからだ。

ふさぎ込むシルタ姫の元に久しぶりにセルダが姿を現した。立っているのもままならぬ様子でシルタ姫に歩み寄る途中膝を折った。ルードが駆け寄って助け起こすと、セルダは姫を見つめて力なく微笑むと謝った。

体調を崩して寝込むようになった時、セルダがシルタ姫に会いに

行っていた事を両親に知られてしまったらしい。シルタ姫は人の命を食らう化け物だと城下で噂になっていた。

両親はシルタ姫に会いに行く事を禁じたがすでに遅かった。セルダは日に日に衰弱していく。

そして、シルタ姫があれほど触れる事を拒んでいた理由を理解したのだ。

セルダは、シルタ姫やルードの言う事を聞かなかった事を謝った。自分が死んでしまったら、城下の人々が益々シルタ姫の事を化け物扱いするだろう事を謝った。

それからルードの手をほどいて、よろよと立ち上がると倒れ込むようにしてシルタ姫にしがみつき、もう一度謝った。

やがて、しがみついたセルダの腕から力が抜け、その身体はシルタ姫の足元に滑り落ちた。シルタ姫はその場に座り込むとセルダを抱き寄せた。

そして、腕の中でどんどん冷たくなっていくセルダに頬を寄せる  
と涙を流した。

声も出さずに静かに泣き続けるシルタ姫の髪がフワリと浮き上がった。同時に彼女の身体から徐々に闇の力があふれ出す。

危険を察知したルードは咄嗟に呪文を唱えて自らを結界で覆うと、城の周りに施した障壁の発動を開始した。

広範囲に渡る大規模な魔法は完全な発動までに時間がかかる。城の周りを魔法障壁が徐々に覆い始めたその時、シルタ姫が天を仰いで悲鳴を上げた。

それを合図に爆発的な勢いであふれ出した闇の力は、完成間近なルードの障壁を押し広げ、奔流となって城の外へと流れ出した。ルードは舌打ちと共に、国を覆う障壁の発動を開始した。闇の力の暴走は瞬く間に王国全土に広がり、国中を死の呪いで覆い尽くした。

幸いにも間一髪のところではルードの障壁が先に完成したため、国外に被害が及ぶ事はなかった。



やがて闇の暴走が収束すると、放心状態のシルタ姫が、歩み寄ってきたルードを、うつろな目で見上げて懇願した。自分を殺してくれと。

ルードは黙ってシルタ姫を抱きしめると呪文の歌を歌い始めた。自分がシルタ姫に同情し、ためらっていたばかりに、国ひとつ滅ぼすほどの取り返しのつかない悲劇を招いてしまった。

ルードは己の心の弱さを呪ったが、それでもシルタ姫に死を与える事はできなかった。

ルードが歌い終わると、シルタ姫は深い眠りに落ちた。彼女が眠りにつくと、国中に広がった闇は徐々に薄らいでいった。

ルードはシルタ姫を城の中に移すと銀の城に鍵をかけた。

一日にして滅んでしまった国の噂は、しばらくの間近隣の国々を賑わしたが、すぐに人々の記憶から消え去ってしまった。噂が落ち着くと、ルードは銀の城を丸ごと人目につかない闇の森の奥深くに移動させた。

いずれ誰かがシルタ姫を起こすだろう。それはおそらく、先日自分の元を出て行った弟子の一人であろう事はわかっていた。闇に転向したという、彼の者なら或いは。

## 10・Good Night

ルードの長い昔話が終わった。

感極まって涙ぐむルードとトウーシャを冷ややかに見つめてエトウーリオが口を開いた。

「お涙頂戴の昔話は、もう終わったか？ 大方の予想はついているが、私に何をさせようというつもりだ」

ルードは静かに微笑むとエトウーリオに問いかけた。

「エト、還元の呪文を覚えておるか？」

「光の上級魔法か……」

還元の呪文は、地、水、火、風、光、闇、全ての属性の魔力を無に帰する光の上級魔法のひとつである。エトウーリオもルードの元を立ち去る少し前に、修得している。

「まさか、私に還元の呪文を使えと言うつもりじゃないだろうな」

エトウーリオが眉をひそめて見据えると、ルードはにっこり笑った。

「察しがいいな。そのつもりじゃ」

「断る！」

エトウーリオは間髪入れずに拒否した。

「光の魔法使いならトウーシャがいるではないか！ トウーシャにやらせる！」

鏡の中のルードはチラリとトウーシャに視線を送った後、目を伏せて深くため息をついた。

「わしも、そうしたいのは山々なんじゃが、トシの歌では姫が永眠につくどころか、発狂してしまいかねんなのでな」

「それは言えているな」

納得して頷くエトウーリオの横でトウーシャがガツクリ肩を落と

した。

「……ひどいです。ルード様……」

ルードはトウーシャの言葉は無視してエトウーリオを急かした。「納得したなら、さっさと上へ行け。わしの描いた魔法陣がまだあるはずじゃ。おまえたちなら見えるじゃろ。久しぶりにおまえのきれいなボーイソプラノが聴けるかと思うと楽しみじゃのう」

楽しそうに目を細めるルードに顔を近づけると、エトウーリオは意地悪く笑った。

「残念だったな。ボーイソプラノはもう出ない」

「テノールでもバリトンでもよいぞ。おまえの歌はきれいじゃからのう」

「だから、断ると言ってるだろう！」

苛々したように怒鳴るエトウーリオをルードはからかうように指差した。

「やけに嫌がるが、まさか、たった三百年かそこいらで、呪文を忘れてしまったとか言うんじゃないだろうな。魔法の天才児とか言われてチャホヤされておったが、所詮はその程度のヤツじゃったか。情けないのう」

わざとらしく大きなため息をつくルードを見て、エトウーリオはルードの映った鏡を両手で掴むとガタガタ揺らした。

「貴様、それ以上愚弄すると、引導を渡してやるぞ」

ルードは臆することなく、涼しい顔でエトウーリオに言い放った。

「忘れたのではないのなら、証明してみせよ。でないと、闇の最高位は口ほどにもない奴だと言いふらして回るぞ。わしは霊体じゃから、どこにでも行けるしの」

エトウーリオは絶句して動きを止めると、鏡から手を離し、ルードを睨んで指差した。

「いいだろう。そこから出られるなら、ついて来い。完璧な魔法を見せてやる」

まんまとルーイドの挑発に乘せられたエトウーリオは鏡に背を向けると扉へ向かった。

ルーイドはトウーシャと顔を見合わせて笑みを交わすと、彼を手招いて耳打ちした。

「実はここから出られんのじゃ。連れて行ってくれ」

「ええ？」

トウーシャは呆れたようにルーイドを見つめると、鏡を持ち上げて小脇に抱えた。扉へ向かおうとするトウーシャをルーイドは呼び止めた。

「トシ、その箱を持って行け」

ルーイドの指差した、鏡の立ててあった床の上には小さな箱が置いてあった。

「万が一の時のために、エトにやろうかと思ったが、あの様子じゃ必要なさそうじゃいな。おまえの仲間に使つとよい。死んでさえいなければ、それで回復するはずじゃ」

トウーシャは箱を拾い上げると急いでエトウーリオの後を追った。トウーシャが追いつくと、エトウーリオは扉をくぐり抜け、ゆつくりと階段を上がり始めていた。横から覗き込むと稀に見る真剣な表情で、何やら考えを巡らせているようだ。

「おい、少し急ごう」

トウーシャが声をかけるとエトウーリオは目もくれず、片手を拳げて制した。

「少し黙つてろ」

仕方なく引き下がると、トウーシャは鏡を少し傾けてルーイドを見た。ルーイドは何も言わず満足そうにニコニコ笑っている。

聞いても教えてもらえそうにないので、トウーシャは気になっていた別の事を聞いてみた。

「ルーイド様、途中の扉のキーワードって、なんで『This is a Pen』なんですか？」

「おまえのくれた英語の教科書の一番最初に載っておったからじゃ」

「……意味はないんですね。でも、エトウーリオに英語はわかりませんよ」

そう言ってトゥーシャがため息をつく。ルーイドは事も無げに言う。

「そんな事はわかっておる。じゃが、エトは昔からズル賢いからの。面倒な事や危険な事は必ずおまえにやらせてたじやろう。おまえを連れてくる事くらい計算済みじゃ」

「……なるほど」

年の功と言うべきか、自分が都合よく振り回されているエトウーリオよりも、一枚上手なルーイドの計算高さにトゥーシャは脱帽した。

自分にその半分でもしたたかさがあるなら、ここまでエトウーリオのいいように利用される事もないのだろうにと思うと、思わず大きなため息が出た。

「そういえば、還元の呪文にも英語が混ざってますよね」

トゥーシャが思い出したように問いかけると、ルーイドは楽しそうに笑った。

「あの頃は気に入っておったからの。おまえたちに教えたのは改訂版じゃ」

ルーイドは時々、呪文の言葉を改訂していたらしい。

「でも、なんでラブソングっぽいんですか？」

「その方が覚えやすいじやろう。小難しい言葉を並べても覚えられんし、舌を噛んでは失敗するだけじゃ。言葉は時代によって変わるもの。その時代に合ったわかりやすい言葉で呪文も改訂するべきじゃ。まあ、多分にわしの趣味が反映されとるがな」

そう言つとルーイドは声を上げて笑った。

その時、考え込んでいたエトウーリオが突然声を上げた。

「よし。さつさと片付けるぞ。じじい！ めん玉ひん剥いて、しっかり見てろ！」

振り向きもせず高らかに宣言すると、エトウーリオは早足で階段

を上がり、シルタ姫の部屋の前に立った。

扉に手をかけようとしたエトウーリオが、一瞬ためらうように動きを止めた。その間に側まで来ていたトゥーシャが怪訝な表情でエトウーリオを見た後、扉の方へ注意を向けた。

中から微かにシルタ姫の笑い声が聞こえてくる。

エトウーリオは一気に扉を開け放つと、部屋の中へ踏み込んだ。鏡をかかえたトゥーシャも後に続く。

見るとベッドの上に座ったシルタ姫は、気を失ってぐったりとしたトムを抱きしめ、クスクスと楽しそうに笑いながら何かを話しかけていた。

エトウーリオはベッドに向かって歩き始めると、ついて来ようとするトゥーシャを制した。

「来るな。貴様はその辺でじじいと共に結界でも張って眺めてろ」  
そう言つと、大股でベッドに歩み寄つていった。トゥーシャはベッドの向こう側の床に普通には見えない魔法陣を見て取ると、それがよく見える場所まで進んで立ち止まり、かかえていた鏡を自分の前に立てた。

鏡の中のルードは黙つてエトウーリオとシルタ姫をじつと見つめた。

近付いて来たエトウーリオに気付くと、シルタ姫は再び敵意を露わにした。トムを抱き寄せエトウーリオを睨む。

「来ないで！ セルダは渡さないって言つたはずよ！」

シルタ姫が乱暴に引き寄せたので、トムが苦しそうに少しだけうめき声を上げた。トムがまだ無事だった事に気付いてトゥーシャはホツと胸をなで下ろした。

エトウーリオは先ほど話しかけた時より幾分強い口調で、シルタ姫に語りかけた。

「いいかげんに目を覚ませ。そいつがセルダでない事は君にもわかつているだろう。眠っている間に全部忘れたのか？ 自分のしでかした事を。君は国をひとつ滅ぼしたんだ。昔の事は忘れて、また同

じ事をするつもりか？」

エトウーリオの辛辣な言葉にシルタ姫が全身をピクリと震わせた。抱きしめているトムに視線を移すと、腕の力を抜いた。そして、ゆっくりと顔を上げエトウーリオをまっすぐ見つめた。

見開かれた大きな瞳から涙があふれ、頬を伝う。

「……どうして私、生きてるの？……殺してって言ったのに……」

エトウーリオは口の端に笑みを浮かべると、ベッドに片ひざをついてシルタ姫に右手を差し出した。

「来い。私が呪縛から解き放ってやる」

シルタ姫はトムから離れると、ひざ立ちでエトウーリオに歩み寄りその手を握った。エトウーリオはシルタ姫の手を引いてベッドから下ろすと、そのままルーイドの魔法陣へ誘導した。

二人が足を踏み入れると魔法陣が光を発して姿を現した。

シルタ姫は驚いたように少し足元を見つめた後、エトウーリオを見上げて淡く微笑んだ。エトウーリオも少し微笑み返すと、そっとシルタ姫を抱き寄せ目を伏せた。

そして、話す時よりかなり高い澄んだテノールで還元の呪文を静かに歌い始めた。

Good Night 泣かずにおやすみ

夜が君を包んでくれるから

Good Night 目を閉じてごらん

明日になるまで もうすぐだから

今は悲しみ抑えきれないなら

時間<sup>とき</sup>を止めてあげる

だから Good Night

目を閉じて おやすみ

Good Night 森の木々たちが

君のために歌う子守歌

Good Night 聞こえるだろう

明日になれば きつと変わるから

今はすべて ぼくに預けてごらん

時間<sup>とき</sup>を止めてあげる

だから Good Night

目を閉じて おやすみ

だから Good Night

目を閉じて お・や・す・み

歌が終わると、シルタ姫の全身から力が抜け、ぐったりとエトウーリオにもたれかかった。

エトウーリオは姫の身体を抱きかかえながら、得意げな表情で鏡の中のルードに視線を送った。

ルードは静かに微笑んで小さく拍手した。

「完璧じゃ。おまえに託してよかった」

ルードが顔をクシャクシャにして一層微笑むと同時に、鏡に亀裂が走った。

トウーシャが反射的に覗き込むと、鏡は粉々に砕け散った。

「ルード様！」

トウーシャは鏡の外枠を放り出し、砕け散った鏡の前にひざをついて覗き込んだ。辺りを見回したが、ルードの気配は感じられない。

ぐったりとしたシルタ姫を抱き上げてエトウーリオは魔法陣から出てくると、鏡の破片を見下ろした。



「未練がなくなつて成仏したんだろう」

「そんな……」

落胆するトウーシャをエトウーリオは呆れたように見つめる。

「何を落ち込んでるんだ。奴は元々五十年前に死んでるじゃないか。それより、さつさと少年を起こせ」

「あ、そうだった」

トウーシャは慌てて立ち上がると、ベッドの上に這い上がり、ルードにもらった箱を取り出した。フタを開けると中には液体の入った小瓶が入っていた。

小瓶のフタを開け、トムの鼻をつまむと、喉の奥に液体を流し込む。トムがむせて咳をした時、銀の城全体がグラリと大きく揺れた。トウーシャが腰を浮かせて、落ち着きなく辺りを見回すと、今度は城全体がグラグラと揺れ始めた。

エトウーリオは細かい埃が舞い落ちる天井を見上げて、忌々しげに舌打ちした。

「じじい、還元の呪文に反応して崩れる仕掛けでもしておいたな」

「ええ?! ヤバイじゃないか!」

トウーシャは急いで立ち上がると、まだ気を失ったままのトムを肩に担いだ。

「さつさとここを出るぞ」

二人はそれぞれ人をかかえて部屋を走り出た。

城が軋み、壁や天井に次々と亀裂が走る。部屋を出て狭い廊下を走り抜け、崩れかけた石段を二つ飛ばしで駆け下りる。

時々破片の降ってくるレンガのトンネルを一気に駆け抜け、城外に飛び出したと同時に、銀の城は真ん中から沈むようにしてゆっくりと崩れ始めた。

二人は安全な場所まで、そのまま走った後、振り返り息を整えながら崩れゆく銀の城を黙って見つめた。



## 11・エピローグ

銀の城が跡形もなく崩れ去り、辺りに静けさが戻ると、トウーシヤはエトウーリオに抱き上げられたシルタ姫を不思議そうに見つめた。

「どうして、消えないんだ？」

全身、闇の呪いに染まって生まれてきたシルタ姫は還元の呪文で呪いが無に帰すると、消えてしまうはずである。だからこそ、ルーイドはためらっていたのだ。

腑に落ちないといった表情で首を傾げるトウーシヤにエトウーリオは意味深な笑顔を向けた。

「私の魔法が完璧だからだ」

そう言つとエトウーリオはシルタ姫の額にキスをした。

「起きろ、シルタ。君は自由だ」

ゆっくりと目を開いたシルタ姫は花がほころぶように微笑むとエトウーリオにしがみつき、頬に謝礼のキスを送った。

「ありがとう」

エトウーリオがシルタ姫を地面に下ろすと、あまりの驚きに言葉を失っていたトウーシヤが叫ぶように問いかけた。

「どういう事だ?!」

エトウーリオは眉を寄せて呆れたように言う。

「貴様、いったい何を聴いていたんだ」

逆に問い返されて、トウーシヤは気が削がれる。

「へ？ おまえの歌の事？ 声変わりしてから初めて聴いたけど、相変わらずきれいな声でうまいなーって……」

トウーシヤがニコニコしながら感想を述べていると皆まで言い終わる前に頭の天辺にエトウーリオがげんこつを落とした。

「何すんだよ。ほめてんのに」

「だまれ！」

頭を抑えて抗議するトゥーシャをエトウーリオが一喝する。

「魔法使いが歌だけ聴いててどうする！ あれは呪文だぞ」

「そんな事はわかってるけど？」

そう言いながらも本質がわかっていないトゥーシャに、エトウーリオは再びげんこつをお見舞いした。

「いちいち殴るなよ」

「貴様には探求心とか向上心とか知識欲とかないのか？！ まがりなりにもルードの直弟子なら、違いに気付け！」

「え？ どつか違ってたっけ？」

とぼけた返答をするトゥーシャにエトウーリオはまたしても拳を振り上げる。トゥーシャは慌てて一步退くと両手を挙げた。

「わかった！ 降参！ だから説明してくれよ」

エトウーリオは腕を下ろすと、呆れたようにひと息ついて話し始めた。

「呪いは闇の領分。私の管轄だ。光は闇を打ち消すが、闇は闇を取り込む。呪いに対して闇の誘い水を向けてやれば、呪いは闇と同化する。一つになった闇を光で打ち消してやればいい。理論はそんなところだ」

無然としてそう言った後、エトウーリオは得意げにニヤリと笑った。

「光の魔法使いルードには決してできない芸当だ。還元の呪文でシルタを消してしまうのは簡単だが、あいつの鼻を明かしてやりたかった。そうそう、じじいの思い通りになってたまるか」

「もしかして、あの階段を上がっている間に考えたのか？」

「ああ。だから少し曲が違ってただろう。　って、気付いてなかったんだっとな」

なんでもない事のように言うエトウーリオをトゥーシャは啞然として見つめた。

還元の呪文は上級魔法だ。それだけでも決して簡単ではない。その効果を崩すことなく、さらに追加の効果を生むアレンジを短時間

で完成させるエトウーリオの技量に舌を巻いた。

だが、ルードはそれを見越してエトウーリオを指名し挑発したのではないだろうか。

還元の呪文ならトウーシャにも使える。しかし、ルードと同様、真の意味でシルタ姫を救う事はできない。だから、闇と光の両方を操れるエトウーリオに望みを託したのだろう。

鼻を明かしたつもりが、まんまと思うつばにはまってしまったエトウーリオがおかしくて、トウーシャは思わずクスリと笑った。

それに気付いてエトウーリオが不愉快そうに尋ねた。

「何がおかしい」

「いや、あんなにきれいな声、どこから出してんだろって気になって。おまえって昔から歌う時の声、全然違うよな」

「ええ？ エトウーリオが歌ったの？」

トウーシャが振り返ると、さっきまで気を失って木の根元に寝かされていたトムが、すっかり元気を取り戻して二人の会話を聞いていた。

「お、すっかり元気になったみたいだな」

トウーシャは笑ってトムの頭をクシャクシャなでた。トムはその手を払い除けて再び尋ねた。

「ねえ、本当にエトウーリオが歌ったの？」

「ああ、別人のようにきれいな声ですごくうまいんだ」

「え　　っ？！　　ぼくも聴きたい。もう一回歌って」

「たわけ」

トムのリクエストをエトウーリオは全く相手にしない。けれどトムは食い下がる。

「いいじゃないか。トウーシャみたいにヒドイわけじゃないんですよ？」

「うるさい」

二人のやり取りを見ながらエトウーリオの隣でシルタ姫がクスクス笑った。

目の前の事しか目に入っていなかったトムが、その時初めてシルタ姫がいる事に気がついた。先ほどまでとあまりに雰囲気違っていたからかもしれない。

「シルタ姫？　なんか、きれいになったね」

トムのセリフにトゥーシャがからかうように横からひじで小突いた。

「なに口説いてんだよ」

「違うよ。さっきまで周りにあった黒くて怖いものがなくなってるんだよ」

トムが言い訳をすると、シルタ姫はエトウーリオの腕を掴んでにっこり笑った。

「彼の歌のおかげなの」

それを聞いてトムの願望が再燃した。

「シルタ姫も聴いたの？　聴いてないのぼくだけ？　ずるい！　ぼくにも歌って！」

だだをこねるトムの胸倉を苛々しながら掴んでエトウーリオは怒鳴った。

「いいかげん、しつこいぞ！　何の義理があつて、おまえのために歌わなければならない！」

「あ……！」

エトウーリオが触れた途端トムはピクリと反応して彼を凝視した。しまったという表情をしてエトウーリオは慌ててトムから手を離れた。が、すでに遅かった。

感情的になつて、うっかり心のガードが弛んだところをトムに察知されてしまったらしい。トムが半笑いになる。

一瞬にして顔に血流が集まってくるのがわかり、エトウーリオは皆に背を向けた。その背中を指差してトムが笑いをこらえながら問いかける。

「もしかしてエトウーリオ、人前で歌うのが恥ずかしいの？」

「え？　そうなのか？」

トウーシャが驚いて目を見張った。

「あんなにきれいでうまいのに。もしかして、それが闇に転向した理由？」

エトウーリオは背中を向けたまま黙秘を続ける。彼が黙っているのをいい事にトムはさらにからかう。

「さつき、赤くなったの見た？」

エトウーリオを指差してエスカレートするトムにトウーシャは忠告した。

「トム、その辺でやめとけ」

「だって、性悪なのにかわい……………つたーい！」

トウーシャの忠告を無視して言葉を続けたトムが、首を押さえてその場にしゃがみ込んだ。

その横でトウーシャは額に手を当て、目を伏せるとため息をついた。

「空気読めよ」

振り返ったエトウーリオが腕を組んで、うずくまるトムを冷やかに見下ろした。

「言いたい事は、それだけか」

トムは痛みに顔をゆがめてエトウーリオを見上げる。

「全部済んだら、これ取ってくれるんじゃないの？」

「気が変わった。おまえは一生私の使い魔だ」

「ひどーい！ うそつきーっ！」

「フン！」

トムを絶望させて気が済んだのか、エトウーリオは刻印を消しはしないものの、トムを痛みから解放した。

首をなでながら立ち上がったトムの肩をトウーシャは軽く叩いた。「自業自得だな。あいつの機嫌が直るまで諦めろ」

トムのためにも話題を変えるべきなのかもしれないが、やっぱり気になったのでトウーシャは尋ねた。

「蒸し返して悪いけど、闇に転向したのってトムが言った事が理由

なのか？」

エトウーリオは不愉快そうにトウーシャを睨む。

「うるさい。ルードの陳腐なラブソングに嫌気がさしたただけだ」

エトウーリオが吐き捨てるように言うと、トウーシャの後ろから声が聞こえた。

「聞き捨てならんのだ」

全員が一様に驚いてトウーシャの後ろに注目した。そこには霊体のルードがニコニコ笑いながら宙に浮いていた。

エトウーリオは思い切り動揺し、ルードを指差し叫んだ。

「まだ迷っていたのか！ 未練はなくなっただろう。さつさと成仏しろ！」

ルードはエトウーリオの側までフワフワ漂ってくると一つため息をついた。

「天涯孤独となったシルタの行く末が気がかりなのだ」

「案ずるな。シルタは私がもらう」

エトウーリオの言葉にトウーシャがささず反応する。

「もらうってどういう意味だよ。まさか光源氏計画じゃないだろうな」

「なんだそれは」

「幼い女の子をさらってきて、自分好みに程よく育ったところをおいしくいただくっていう……」

「なるほど、そういうのも悪くはないが、そんな気の長い事をしなくても女に不自由はしていない」

「あ、そ。じゃ、どういう意味？」

「私の弟子にする」

ルードもトウーシャも驚いて目を見開いた。

「シルタ姫に魔法を教えるのか？！」

「何を驚く。無意識とはいえ、国を滅ぼすほどの闇の力を押さえ込んでいたんだぞ。充分素質はある」

黙ってエトウーリオを見上げるシルタ姫にルードが問いかけた。



「よいのか？」

シルタ姫はにっこり笑うと頷いた。

「はい。私を呪いから解放してくれた彼に報いたいと思います」

そして、思い出したようにクスリと笑うと、

「ルード様が以前話して下さった、おませで小生意気な金髪の弟子とは彼の事ですよね」

と言い、エトウーリオを横目で見上げた。

「じい。シルタに何を吹き込んだ」

エトウーリオが睨むと、ルードは逆に睨み返した。

「シルタに手を出すでないぞ。呪いの影響で見かけは少女じゃが、おまえたちより若干年上じゃ」

「それは願ってもない……って、だから、女に不自由はしていないと言ってるだろう！」

苛々して怒鳴るエトウーリオを横からシルタ姫も援護する。

「大丈夫です。私も年下には興味ありませんから」

エトウーリオは一瞬絶句してシルタ姫を見つめた後、気を取り直してルードに、

「聞いた通りだ。安心して、とつと成仏しろ」

と言うと、片手を振って追い払った。

ルードは名案を思い付いたらしく、突然手を打った。

「そうじゃ、わしはシルタの守護霊になるとしよう」

「人の話を聞いてないのか?! 成仏しろと言ってるだろう!」

怒鳴るエトウーリオの肩をトゥーシャが叩いた。

「じゃ、話がまとまったところで日が暮れる前に帰ろう。ぼくはまだ残処理がいろいろあるんだ」

「どこがまとまってると思うんだ。ったく!」

ブツブツ言いながらも、エトウーリオは地図球を取り出すと、先頭に立って帰路へついた。

闇の森は刻一刻と変化している。地図なしでは歩けないのだ。ルードはシルタ姫の横に移動すると話しかけた。

「シルタ、おまえの人生は今始まったようなもんじゃ。今度こそ幸せを見つけられればよいな。落ち着いたら、一緒にセルダの墓参りに行こう」

「はい」

シルタ姫はルーイドを見つめて微笑んだ。

かつて暗い目をして俯いていた少女が、今日の前で微笑んでいる。この笑顔を誰よりも見たいとルーイドは長年思っていた。

そして、不機嫌そうな顔をして先頭を歩くエトウーリオの背中を見つめて、心の中で礼を述べた。

帰る道すがらトウーシャはトムに尋ねた。

「ところで、おまえの方はフラグ立ったのか？」

「わかんない。帰ってみないと。トウーシャの方こそ、箱の封印解いちゃって大丈夫なの？」

心配そうに尋ねるトムに対して、トウーシャは呑気に笑う。

「中身を元に戻して封印してしまえば、エルフィア姫にはわからないさ」

確かにエルフィア姫にはわからなかった。だが、城の魔法使いたちにはあっさりバレてしまい、後日トウーシャはこつてりと絞られたのだった。

（完）



## 11・エピソード（後書き）

最後まで読んで頂いて、ありがとうございました。

シリーズ展開するつもりで、二年前にこの話を書きましたが、未だに続きを書いていません。

そんなわけで、突発性人間症の猫少年や闇の刻印の何が懐かしいのか、とか色々謎が残ったままになってて、すみません。

その内書くつもりはあるので、気長に待つて頂ければ、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7873o/>

---

Song Of Magic 【銀の城】

2011年6月4日01時25分発行